

344
431

6 7 8 9 6^m 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 7^m

始



特234
33



第一輯

守田

保



序

ペンの雫が一滴原稿紙の上に落ちた。吸取紙で抑へたがにじみ出て紙の上を這ふ。それが文字となり文章となる。結局出鱈目に過ぎない。雑誌教育を創刊したのが大正十三年二月、昭和七年五月其の第百號を迎へた。其の間毎號二頁宛小活字で書いたのだがよくも續いたものだ和我れながら感心する。小見出し五百に及んで居る。

時に修養譚もあり時に教訓めいた事もあつた、時に皮肉を並べたり、彌次をとばしたり高等批評をやつたり、不平をいつたり、反抗したり、素破抜いたり、罵倒したり、ナンセンスを書いたり、随分と罪も作つた筈。其の原稿の中から百三十ほど拾ひ出したのが本書である。

○

人生・修養・教育・趣味・私と大きい五つの見出しをつけたがそれに大して意味はない。多

少そうした心持の濃厚なものを分類しやうと考へて見たまでだ。どこにも私の人生観や修養観やがにじみ出て居る筈。不統一の中に私による統一がある筈、とうぬぼれる。大体修養書や教訓書のもりの本ではない。隨時心にうかんだまゝの隨筆だもの、大した價値を期待されては迷惑する。頭の痛れた夏の宵、安樂椅子に横つて讀んでいただく位のもの。

○
大正十三年以來書いたのだから、今の世の姿に照らされると變なものもある筈。又季節も春から秋にとんだり夏に戻つたりする様に感じられる妙なところもある。一々書いた日附をすればよかつたがそれも繁雜なので一切省略したから。大見出し毎に古い時のものから新しい時のものと排列してはある筈。

○
大見出しのカットも全部私の手になつたもの。人生は水泳の飛込みの様なものだ。先づ理想の天を望み、現實の地を眺め、いよくといふ刹那は目を閉ぢて飛び込むのだ。修養

永遠の彼方に一步一步のあこがれを運ぶのだ——蝸牛そろそろ登れ富士の山——。教育、迷へる一匹の羊を探し求めてさまよふ羊飼の心で表徴した。そして趣味は私のすきな竹の畫であらした。黙々生とは私の別の名です。

○
私の敬愛する方々へつゝしみて本書を捧げる。

昭和七年十月

守 田 保

ペンノ季

第一輯

目次

一、人生

愛か信か
死
歩む人
事業
大掃除
人生
瘦我慢
赤百合

一瞬間
妥協
遠泳
ぼんやりする心
年の運命
パンク
野心
偶語

燕
木に凭りて
概念
刹那の永遠性
幸福！
完全
伸びる者
敵

宗教
病める友へ
朗かに笑へ

力
信仰
体験

無愁
光は闇より

二、修養

獨身主義
修養
食はすぎらい
時を惜しめ
語學
乃木大將
缺乏の感謝
堅忍

Y子様
秘密
平凡な事
眼鏡を外して
日記
辯解
わがまゝ
時間勵行

輕業を見る
變節
禁酒
椋の森
境遇
蘭
自信
感激

我執
更生
年の甲

みな様
伸びよ
悔ひ

矛盾
數ある小徑

三、教育

フレイベル先生
深紅の薔薇
子供の道德意識
怪げなる日本人の能力
學校小屋
竹本みき子
感化の力

三月
旅人
小事
アンチイック
一女師の自殺
會話
象牙の塔より

一生に一生でも
教育の原理
一圓の小爲替券
立聞き
巢立つ雛
母
西村澄子

四、趣味

火星來る
 苦悶の象徴
 幸福
 頭をあげよ
 Kの手紙
 臍
 籠の鳥
 燈火可親
 夕の鐘
 神の聲
 運命の絆
 寫眞
 久野久子女史
 屋守
 慈悲
 社會鍋
 駄句
 希望
 感激
 百
 無縁の縁
 永遠の誤解
 「私の生活記録」を読む
 人間なるが故に
 剃刀
 無憂華
 春待つ心
 源平争亂
 巢立ち

五、私

ある年の日誌より
 月の感情
 單調
 入院
 子を思ふ
 教へ子
 蝸牛のうごめき
 讀書千卷
 春！
 死に面して
 本の評
 Fより
 充されざる悲哀
 祈り
 病氣
 縁
 T
 著述

◆ 愛か信か



愛せられる事は望ましい事である。信じられる事は更に望ましい事である。愛せられても信じられて居ない事がある。信じられても愛せられて居ない事もある。でも眞の愛は信の上にある眞の信は愛と伴ふ。愛は花であり信は實である。花は實の爲めに咲き實は花の爲めに結ぶ。人の世に自分より外に人が無かつたら如何に淋しいものでせう。而して人と人との間に信と愛とが無かつたら如何に淋しいものでせう。漱石の行人に出る一郎が妻を愛しては居るが信じないで悩む心、幽芳のお夏文代に出る善之助がお夏を愛しつつ疑ふ心。いかにもいたましい。友達でも兄弟でも隣人でも相信じ相愛するところが人の世の人の世らしいところである。

◆ 一 瞬間

寫眞師「ハイ一寸動かす——え宜しうございます」

寫眞へうつるは一瞬間、しかも仕度は一時間も二時間も、脱いで見たり、着て見たり、白粉つけたり、髪を直したり。

媒介者「左様、先方は相當の財産家で、好男子で、東京出の文學士で」

娘の親「文學士！ よろしい、やりませう。何分宜しくお頼み申します」

娘を賣るは一瞬間、しかも仕度は二十幾年、やれ女學校だ、やれお花だ、お茶だ、お琴だ、お針だと大騒動なり。

でもこれが人生の姿だ。

◆ 燕

四月の始に来て巢を造つた燕が五月六月の間に卵を生み、雛をかへし雛を育て、七月の初め

には親子連れだつて飛んで行つた。人間が子供を生み落してから一人前に育て上げるまでの憫みと思ひ合はして鳥の幸福を羨んで見たりする。聖フランシスコが鳥を集めて話したといふ談を思ひ出した。

「わが姉妹なる小さき鳥たちよ。お前達は仕合者だ。どこへでも飛べる自由の翼を持つて居る。濫い着物をきてゐる。お前達は種も時かず、畑も作らぬけれども食べるものは澤山ある。渴すれば川も泉もあつていつでも自由に飲むことが出来る。お前達の子供は心配せずとも大きく育つ。お前達は本當に仕合者だ。決して決して我儘を云つてはなりませんよ」

ところで鳥は自分等に興へられた自然の恵みを楽しみつゝ生活して居て我儘を言つたり不平を言つたりしない。世の中で最も不平を言つたり、我儘を言つたりして世をすねて自ら求めて不幸の生存をつゞけて居るものは唯人間だけだらう。

◆ 死

近頃の新聞はあまりに死の報道が多すぎる。家族七人連れの水死を初め五人三人と連れだつ

ての自殺、某醫學士の投身、某男爵子息の情死等一種の流行の様に行はれてゆく態を見せつけられる。是は果して健全な社會世相か否か考へねばならぬ。それ等の一つ一つには異なつた原因があり、死すべき異つた事情があつた事は勿論であるが、唯共通の原因は何事かにゆきづまりを感じ、其の解決を死を以てした事にある。極めて稀な場合として死を消極的遁避と考へず生を美化し、清き永世のためにと考へることもあり得るであらう。しかし大体に於ては人生の苦闘からの遁避となつて居る事を否定する事は出来ない。

生は吾々に一回限り許されたる特權である。隨て死も亦一回限り許されたる特權である。容易に簡單に決行さるべきものであつてはならぬ。人生は戦ひである。苦悶は戦ひの象徴である。自動車が時にパンクする様に人生もする／＼と流れる時もあるが時にパンクする事もある。しかしさうした争や苦悶が本當にこの世を人生らしくして居るのである。若し此の世に何等そうしたなやみが無かつたとしたら、必ず吾人は五十年の長き平凡に厭きて仕舞ふであらう。そう簡單に死といふ消極の遁避の道を選んではならぬ。繰返して云ふ死は吾人に唯一回許された特權である。

◆ 妥 協

「先達てイヴセンのブランドの梗概を読みました。先生ももう既にお読みになつて居やうと存じますが、あの雄々しい男性美、卑怯な妥協と折衷を憎んだブランドなる一牧師は一切を捧げて神と人にと奉仕せんことを誓ひ、遂に母を失ひ妻を失ひ教會を失ひ世間の信頼を失ひ一身を妥協の罪の犠牲に捧げたので御座いますつて、主義に倒れ、理想に殉じた彼れ、崇高、莊嚴といふより外御座いません。

あまりに自己を空しうして居た私は煮え切らぬ妥協と折衷との姑息が恥かしくなりません。全てに透徹した深刻な氣分に缺けてゐました。矢張り人間は自己に生きて強く／＼生きねばなりませんのね。下略」

是は八月の末に受取つた手紙の一節である。筆者は相當高い識見と明確な判断とを持つ一女性であるが、止むを得ぬ事情に制せられて姑息な妥協と因循との一ヶ年を送つた爲めに或る意味に於て結婚に失敗した人である。

其の事情と心理の總べてを知る私にはかうした手紙が悲痛な意味をもつて讀まれる。私もそう思ふ。人間に妥協の必要な事もあれど、時々ブランドの様な強い自己の信念と理想とに生きねばならぬ事もあるものだ。

◆ 木に凭りて

廿三日美禰地方へ旅す。汽車の中で農民組合の思想運動の急先鋒と目されて居るM氏と語る。近く農民大學の講習を開くのだと云つてゐた。六時前厚狭驛前の旅屋へ着く。丁度家の後ろに料亭があつて十幾人の藝者はんが黄ろい甲高い聲で騒ぐので中々寝られない。吉田弦二郎の近著「木に凭りて」を讀む。

「人と人との接觸のうちで人を利用せんための接觸ほど不愉快なものはない」

「いゝ加減なおつきあいの萬人を得んよりは、たゞ一人の心友を見出し得んことを冀ふ」
など、考へては讀み讀みては考ふ。(日誌の一節)

◆ 歩む人

道行く人に三通りの歩み方がある。天をみつめてすた／＼と歩くのと。足元を見詰めて悠々と歩くのと。左右を見たり後ろに振り向いたり逡巡として歩くのとがそれである。前者は足は速さも兎もすれば溝や野の井戸にはまることがある。中者は足元は確かだが兎角方角を間違へたりする。其の上足もあまり早い方でもない。後者は失敗は少く、方角も間違はないけれども歩く速度は最も遅い。前者は未來に生きる人であり、中者は現在に生きる人であり、後者は過去に生きる人である。前者は明日の希望の夢を見る人、中者は今日の享樂を娛しむ人、後者は昨日の追懷をなつかしむ人である。前者は青年の心理であり、中者は壯年の心理であり、後者は老年の心理である。前者は理想主義の人であり、中者は現實主義の人であり、後者は歴史主義文化主義の人である。前者からカントが出で、中者からゼームスが出で、後者からデイルタイが出る。

◆ 遠 泳

今年も天気工合頗るよく、暑中休暇前の水泳教授はよほど順調にいつた。兒童の技術もメキ／＼と進む。いつも感ずる事であるが、水泳教育位いゝ意志の鍛錬はない。それは全く命がけの修養だからである。特に遠泳に於て其の感が深い。尋常五六年位の小さい小供が五町十町の遠泳に加はる。三分の一も行つた頃からもう手も脚もきかなくなつて、大鼓の音や船からの激勵の聲にはげまされて僅かに手足を動かすのみとなる。ガンバレガンバレと云はれると更に又一段の勇氣を出して泳ぐ。いくら疲れても手足のあがきを中止しただけで沈むのだ。文字通り命がけの修業をやるのだ。船の上から見てゐても涙ぐましい程いたわしい。いくら疲れても決して船上らうとはしない。やがて目的地に近づく、拍手の音に迎へられて着陸する頃にはまだいくらでも泳げますといった様な一種の誇らしい顔の色さへ見える。水泳教育は水に馴れる水泳の技術を練る、身体を丈夫にする。こんな大切な使命があるがそれにも増してかうした命掛けの意志修練をやるところに大きな價值がある。

大きな理想を描いて、スタートを切る人生は結局遠泳だ。命掛けの遠泳だ。途中で疲れる事もある。もういけない助け船に上らうかと思ふ時もある。そこをガンバルのだ。着陸した時の愉快は、苦しいガンバリを嘗めた人へのみ興へらるゝ幸福なのだ。遠泳教育はたしかに人生教育だ。

◆ 概 念

「理智を以て理智の規則を如何に考へたからとて決して理智から超越し得るものではない。歩行の方法や駆足の方法を如何に工夫しても游泳が出来るものではない。游泳術を得る唯一の方法は水に飛び込む事にある」とベルグソンは其の著創造的進化に書いてゐる。われ／＼はあまりに概念にすぎる。如何にもがいても概念の中でのものがきは遂に概念から出る事は出来ない。人生は概念ではない。人生は哲學ではない。人生は科學でもない。食はねば死ぬる事實である切れば赤い血の流れる生命である。人生を遊戯化する事は必要である。然し遂に遊戯ではない。道徳も宗教も藝術も遊戯化されてゐる間は天下は太平だ。しかし何れも遊戯ではない。生の事實である。理屈を言ふ者には理屈を言はしておくさ。理屈は呼べば答へる山彦の様なものだ。

道德の埒内で道德をとき藝術の埒内で藝術をとくのは子供が蟬のぬけ殻を並べて競争させてゐる様なものだ。トンボ一匹のとり合ひが基で、なぐり合ひや攫み合ひの喧嘩をしてゐる子供の方が本當なのだ。

◆ 事 業

三上於菟吉氏の「炎の空」の中に小野が、弱き小羊の様な麗子の境遇に同情して、其の難儀を救つてやらうとする。

麗子が「あなたなんか色々立派な御事業がおありでせう。女一匹です、どうぞかまわず、お見捨て下さい」といふと小野が容を正して

「人間の仕事についてそのやうにお考へにならぬものです。價值ある仕事は何も見掛の大きさを要求しないのです。僕の考へではあなたのやうな方が深い艱難の渦の底でもだへて居るのを救ひ上げる事が出来れば、それはどんな所謂大事業を成し遂げたにも匹敵すると思ふのです」

といふところがある。成程そうだと思ふ。巨萬の富を積み大きな工場を興して大なる生産事業をなすのも、重役となつて大きな會社を支配するのも、代議士となり大臣となつて一國の政治を左右するのも、新聞雑誌を主宰して社會輿論のリーダーたるのも、學究となりて大學問を研究するのも何れも意義ある事業であらう。しかしながら唯一人の低能の子供を血と涙とを以て導き育てるのも亦意義ある事業ではなからうか。自分はいつも思ふ唯一人でいゝ本當の弟子が持ちたいと。

◆ ぼんやりする心

近代人の最も大なる不幸はぼんやりする心を失つた事である。あまりにこせくと神経過敏になつた事である。もつとぼんやりした心にかへりたい。ぼんやりした心は己の本當の心、本當の魂の中に遊ぶ心である。

「何をそんなにぼんやりして居るのだ」

と叱る先生の心、イライラと騒ぐをよい事にしてか。せめて一日に三十分でも一切を忘れた時

照が欲しい。

古池や蛙とびこむ水の音

かうした静寂の境地が欲しい。

半夜來客のための酒を求めに出た事を忘れて松の根元に腰を下して月に見とれて夜の更くるを知らなかつた良寛の姿がうらやましい。

夜が更ける。火鉢の火も白い灰になる。机の上には一茶の生涯といふ本が一冊ある。電燈が時々明滅する。

風もなきに机上の一輪挿の山茶花の白い瓣が一枚ポトリと落ちた。静かだ。

◆ 刹那の永遠性

永遠は今といふ刹那であり、今といふ刹那即ち永遠である。無始の過去から無終の未來永劫へと連続してゐると思ふ時間も今といふ刹那の思惟の所産にすぎない。

己が刹那刹那の意識を外にして何が存在する。時間といひ空間といひ結局は己が意識刹那の幻

想に過ぎないではないか。華かなるべき未來の光明を夢みて、今の刹那を忘れる人は、美しくりし過去の追憶に耽りて、今日の生を忘れる人と同様な愚者である。現在の刹那こそ己が人生の總べてである。天をみつめて歩いて井戸にはまるも可笑し、後ろむきに歩いて電柱にぶつかるも可笑し。美しき現在を持つ者にのみ美しき過去と美しき未來とを創造するの特権が與へられて居る。それは刹那こそ永遠なるが故である。二千年の昔ベスピアスの噴火はあの美しいボンベイ市街を一夜にして灰に埋めてしまった。近頃發掘された中に女の寝たまゝの化石があつた。東の白む曉近く、大地の怒りか恐ろしき爆音と共に噴き出した、ベスピアスの灰の降る刹那何事も知らず人間の運命を神に捧げた一人の女性の寝姿こそ二千年の永遠の姿となつてゐるのである。

今の刹那を美しくすることこそ、永遠を美しくすることである。

◆ 大掃除

書齋の隅から隅まで徹底的な大掃除がしたいとの念願が叶つて、十六日の日曜を幸、半日か

けて根本的に掃除した。書棚の整理換や模様換をした。愈すまして椅子にすがると全く昨日とかわつた心境にさへなる。

人間は時に空の大掃除をすると同様に心の大掃除をしなければならぬ。古い何物かのこびりついた頭で考へる事や判断することはどうもやくざな執着がある。出身學校に執着したり、學んだ先生の談が日本一に見えたり、一葉の卒業證書や免許狀が馬鹿にものをいつたり、古く研究した事が鼻の先へぶらさがつたり、十年も二十年も昔の信念が唯一のものであつたり、さりとほなさけない。みつともない限りだ。道徳だつて、世間の慣習だつて日々新しく動くのにある古いものにこびりつく頭は悲しい。セメンのたいきを時々水で流す様に頭の中の大掃除が必要だ。

◆ 年の運命

人の運命の色々なのを見て、其の原因を生れた年月などに當て、考へる程馬鹿らしき迷信はない。全く文化文明の人間のすることでない狂態なのだ。それにまだ丙午だのなどといふ聲を

聞くのはなさけない。

或る人力車夫が一人の紳士を車に乗せて曳く。つれづれなるまゝに客に聞く。「旦那は一体お幾つにおなりですか」客は車上から三十六だといふ。車夫はさも感慨深さうに「そうすると生れ年なんてものは當てになりませんね。俺も卯の六百でやはり三十六ですが、あなたはさうして乗る身分、俺はかうして曳く身分大した相違ではありませんか。旦那一体これはどうしたわけなんでせう」といふ。客は事もなげに「それは同じ三十六でも君の方は挽く(四九)三十六僕の方はラクラク(六六)三十六さ」といつて笑つたといふことである。これはこれ一笑話にすぎない。しかし生れ年の迷信も先づこの程度の笑ひ話にすぎないのだ。

丙午の迷信の如きは一刻も早く社會から葬りたいものだ。

◆ 幸福！

幸福！

一体そんなものが有るのだらうか。

結局震氣樓のやうに時々美装して出ては人を迷はせる幻に過ぎないかしら。
クローバーの四つ葉の上に宿る露の様なものさ。風が吹けば一たまりもなく散るし、日が照つても消えてゆくものだ。
でも誰も追ひ求めてゆくではないか。
さやう。それが人生なのだ。

◆ 人 生

今日も高山樗牛の「人生終に奈何」を読む。「悟れ一瞬の須臾なるも千歳の久しきも天地の無窮なるに比すれば等しくこれ一刹那なるにあらずや、名その死と共に滅するも死後千年を経て亡ぶるも其の終あるに至つては一なり。人、生を此の世に享け一時の名を希ふ五十年の目的遂に之に過ぎざるか。予甚だ之に惑ふ」と。

人生を早くした樗牛はあまりに早く人生を片付けようとした。早く疑ひ早く悟らうとした。生を急いだため早く結論づけやうとあせつた。人生は思惟ではなく体験である。思惟で悟る

人生は皮想で浅く、体験で悟る人生は徹して深い。富士へ登らずして麓から見上げただけで登る苦痛を訴へるのは悲しい。六根清淨六根清淨を唱へつゝ一歩一歩とぼく／＼と登るところ登山の興味と喜悅と満足とが湧くのではなからうか。富士を悟るの特権は登つた人に見られる。

しかしながら自分は悟るための思索を排斥しようとするものではない。体験なき思索は価値少く、思索なき体験も価値少い。思索は体験の機縁であり、体験は思索の機縁である。

獨歩、紅葉、樗牛、梁川、一葉、大杉これ等生を早くした哲人は多く思索で人生を結論づけやうとした。随て其の人生観は濃厚な特色があつて理想的である。唯多くは死に直面して其の思想がクライマックスに達したために人生を暗く見、疑つて見ようとした傾が多い。しかしこれ等天才哲人の思索は吾人に教ゆるものが多い。唯強いて求むれば体験の足りなさを見る。

◆ バ ン ク

自轉車に衝突がある。

自動車にパンクがある。
汽車に脱線がある。
飛行機に墜落がある。
大河に氾濫がある。
火山に爆發がある。

あつてならぬ事、なくも哉と願ふ事だが矢張ある。幾十幾百の貴重な人命を乗せた汽車が正面衝突して其の貴重な人命を失ふ事もある。大河が氾濫して村や橋が押し流される事もある。火山が爆發して大きな都市を一朝にして灰の下に埋めて仕舞ふ事もある。

人生にも亦パンクあり、衝突あり、脱線あり、墜落あり、停電あり、氾濫あり、爆發もある。常にする／＼とすべるときまつて居ない。病みてしみ／＼思ふ。

◆ 完 全

あなたはあまりに完全にあこがれすぎます。完全は物の終末ですぞ。

不完全を讚美する程の心のゆとりが欲しい。あせつてはなりません。あせつてしたところは幾多の隙が出来てゐます。求むるものは完全でも求められたものは不完全です。あこがれは道程で讚美は中途ですぞ。満ちた月には缺け初めの淋しきがあります。
御自愛を祈ります。

◆ 瘦 我 慢

この頃出版されたい、本に將軍乃木といふのがある。あの肉弾の著者として名高い櫻井忠温大佐の著である。乃木大將の人間らしいところを書いたもので近來の名著だと思ふ。實業之日本社から出したものである。中にこんなところがある。

乃木さんは少時体が弱くて普通の人間になれないと云はれて居たさうである。それを押し通して來たのは乃木さんの瘦我慢一つであつた。晩年痔がひどく悪かつた。片目と言つてい、くらい一方の眼も悪かつたが決してそれを人に言はなかつた。何でも十數年も長い間だれも知らなかつたといふ話である。それ程瘦我慢の強い人であつた。又ひどいリウマチスもあつ

た体には三箇所大きな戦創があり、乃木さんの体は病氣と創とで固めて居たほどであつた。なる程、そうだ人間は一生瘦我慢で通れないことはない。瘦我慢の尊さを思ふ。

◆ 野 心

若さは幻想と野心との焰である。

野心といへば何だか人を押し倒しても進出する覇者暴君の振舞の様な語感がないでもないが之れは野心の曲つた一偏見である。常に優者たらしとする優越感。それは決して人を倒さうとする不徳義を含むものではない。常により高くより強くより太くと憧れる意氣である。人一度この元氣を失ふか去勢された馬の如く、意氣喪々。見るもあわれな者となり終る。

青春の血はみなぎる野心の焰に白熱して沸騰してゐるところに本然の姿がある。學校教育に於てもよりよき民衆、よりよき平凡人を理想とする極、どうかすると去勢した様な子供を作りたがる、排英雄主義の教育はどうかすると人を卑屈にし小さくする。小學校時代の少年が大將大臣大富豪大發明家を希望するを咎めてはならぬ。かうしたあこがれこそ若き心の力である。野

心の影のうすれゆく寂しさを思ふ。

◆ 伸 び る 者

萬山の緑の木、萬野の緑の草、和煦たる春陽と蕭々たる五月雨に育てられて、すく／＼と伸びに伸ぶ。春は芽の出る時芽の伸ぶ時、花の附く時花の開く時、すべては潑刺たる元氣に満ち満ちてゐる。

ふりかへつて私共の日常の有様を見る。果して草木の様に元氣に伸びつゝありや否や、伸びる者は伸び、伸びざる者は縮む。進む者は進み、進まざる者は退く。求めなければ與へられない。叩かなければ聞かれない。伸ぶ心は求むる心である。伸ぶ心は叩く心である。意氣地なき日を送るあわれさを思ふ。

◆ 赤 百 合

梅雨霽れの初夏の午後。讀書に疲れて庭を歩く。

大きな赤百合に一羽のあげはの蝶がたわむれてゐる。

手をあげて蝶をうつ。美事命中。蝶は落ちた。

しかし同時に百合の花に手がふれた。落花狼籍、花片あたりに四散する。

蝶をうたうとして花を散らす。

世の中に亦かくの如き事少しとせず。

◆ 偶 語

○ 信じてよい場合がある。疑はねばならぬ場合がある。信ずることは楽しい。疑ふ事は悲しい。しかし信じて残す悔は疑つて残す悔よりも深刻である。

○ 愛すべき人を愛し、愛さるべき人に愛さるゝは人生を明るくする。しかし愛す可らざる人を愛し、愛さる可らざる人に愛さるゝは人生を暗くする。

○ 心のうつろを塞がねばならぬ。うつろには清い水ばかりでなく、濁つた水も亦流れ込むからである。

◆ 敵

人生には大小色々の意味に於て敵があります。そして私共の日々は實に此の敵との戦であります。國家といふ立場に於て英米は敵であり。我等の健康から見れば結核菌、微毒菌は敵であります。我等の修養生活から見れば怠らんとする心、悪と知りつゝ悪に陥る心はまさしく敵であります。私共は毎日毎日これ等の敵と戦ひつゝあるのであります。軍縮會議も戦であり、醫學會議も亦戦ひであり、講習會修養會參禪も亦戦ひであります。

この頃結核豫防デーといふ催があり、鳴物入りの大騒ぎが全國的に行はれる。これも亦一種の戦であります。生活の戦は直接生命を脅威するが故に一層深刻なるものがあります。資本主と労働者との争、所謂労働争議は全くこの戦であります。この頃鐘紡の盟休、東京市電の争議

が突發して居ます。かゝる争ひも段々團体的になり、組織的になつて來ました。丁度戦争が大刀ふりかざした昔の一騎討から銃砲による今の團體戰に變つた様に。

ところで面白い事には敵が強ければ強だけ戦が困難でありますから、其の戦ひに勝つために色々と工夫が行はれます。其の工夫がやがて學問の進歩といふものなのであります。日本の學問の中で世界に進出し、尖端を行きつゝあるものが三つあると云はれて居ます。曰く醫學、曰く地震學、曰く海軍學、と。日本の醫學が世界に進んで居る事は日本人の健康が世界に劣つて居る事を示します。日本の地震學が進歩して居る事は日本が世界に於ける地震國だといふ事をあらはします。日本の海軍が世界に進んで居る事は強敵英米を海に於て防ぐ外ないからであります。

生活の緊張も學問の進歩も敵なればこそだと思つた時、私の頭に基督の所謂「敵を愛せよ」のことばが閃くのを感しました。

◆ 宗 教

咲いた花は散り、満ちた月は缺ける。しかし一度散つた花も春が來れば又蕾をきり花をつける。缺けた月も亦満ちる日が來る。然し人は一度死して再びとは來らず、永遠に其の影をあらはさず。永遠に呼べど答へず。然らば死は一切の終局か。富も榮譽も力も智慧も地位も權勢も死の前に立ちて果して何の權威ぞ。人間は自ら目隠しをして死の噴火口の上に踊り狂ふ愚者となつて居るのではなからうか。さて死とは何か、この疑問に直面した時私の心の中にある光明の閃きを感じる。死は終末に非ず。ある世界への關門だ。靈の世界に於ては死は波の一搖に過ぎないのだ。かくて宗教は死を來世への入口として教へる。宗教なき人は人生をこの世限りで結末づけようとする。其の動き方は小さく弱い、そして醜い。大きな或る力に歸依して太く強く美しく人世を渡らねばならぬ。宗教なき人間は色なきパンジーの如く、香なき薔薇の如きものだ。(教生Fさんの死を聞きて)

◆ 力

在ることは知つて居るが見る事も出来ないし、聞くことも出来ない何の力も無きさうな空気も一度低氣壓といふ刺戟に怒り出すと其の力はかくの如く大颯風となつて地上のあらゆるものを倒すだけの恐るべき力になる。何事も平穩な姿の中にかくの如き力のこもれるものなる事に十二分の警戒をしなければならぬ。

人間の思想なんてものも亦かくの如きものだ。一度思想の一角に七三〇ミリ位の低氣壓でもおこらうものなら平穩無事の日には夢想だにしなかつた様な事件がまさおこされるものである。古來幾變遷した國の革命など大抵かうした思想の颯風である。宗教亦一種の思想の颯風と見て宜しからう。一度颯風となつて荒れ狂ひ出したらもう防ぐ方法はない。倒れさうな家を棒で支へたり、戸締りをよくしたりする位が精々のことである。もつと早く低氣壓を起さないだけの用心をしなければならぬ。人心に不平と倦怠をおこさせない工夫が上々の策なのだ。

◆ 無 慾

人間が全く無慾になり得たとしたら、どんなに美しいものであらう。世のあらゆる醜惡な場面は慾と慾との軋轢である。身には一枚の法衣をまとひ、無帽裸足で手には一つの鐵鉢と一本の錫杖とをもつてとぼくと我が生みの父母を訪はんとする釋迦、金冠錦衣あらゆる善美を盡した着飾りをなし、黄金造りの牀机に凭れて幾百の家臣を侍らせて之を迎えんとする淨飯王。王を有慾の表徴とすれば釋迦はまさに無慾の表徴、王を物質の表徴とすれば釋迦はまさに精神の表徴である。美しさは決して物質でも、地位でも、財寶でも、名譽でもない。すべてを捨て、残つたものそれである。之れを稱して佛といふ。慾は執着であり、慾は我儘である。而して執着は悩みであり、苦しみである。病氣の苦しみ、貧乏の苦しみ、離別の苦しみ、地位に對する苦しみ、名譽に對する苦しみ、何れか慾のあらはれならぬがあらうか

「あなた今日顔色が悪いね」といはれた一言にすら心のさびしさが湧く。人間は小さい事にも執着するものではある。

「命のいらぬ人間程仕末におへぬ恐いものはない、しかし命のいらぬ人間でなけりや役に立たぬ」といつた隆盛の言葉は確かにこの邊の消息を語つて居る。人間はせめて時々でもすべての已れを捨てすべての慾を捨てた美しい瞬間を持ちたいものだ。

◆ 病める友へ

病床で書かれた鉛筆の走り書きのハガキ今朝拜見した。又熱が出るさうですね。全くお氣の毒だ。しかし友よ。病床は哲學の床だ。不徹底な人生觀や、不徹底な死生觀を哲學せよと神様が命じ給ふた休暇なのだ。病床の苦しさは人生觀更生の苦惱でなければならぬ。あらゆる人間愛慾の惱みから解放されて天井をみつめて思索せよと與へられた尊い修養の時間なのだ。神様は君にかうした大きな恩寵を與へ給ふたのだ。感謝しなければならぬ。僕も一昨年夏ある病氣を抱いて病院生活をした事があつた。其の時つくづく考へたよ。死ぬも生きるも我々は神様に一切をお委せしてあるのだ。若し世の中にまだなすべき仕事があつて活かして置かうと思召すなら今すぐ取上げられぬすまい。若しも此の世に生きても殘骸のみで何の役に立たないな

ら多分命をとり上げらるゝだらう。何れにしても一切お委せしてあるのだ。平和な床に眠ればいゝと思つて居たよ。

哲學せよとつき離し給ふ神様は一方に於ては見えない大きなみ手で強く抱きしめて居て下さるものなのだ。一定の時までたつと薄紙を削ぐ様に病氣は恢復して來る。悲觀してはならぬよ。悲觀とは神様のみ手をふりきつて走り去る所業なのだ。そんな大それた罰あたりをしてはならぬ。小さい弱い生命をかへて強さうな態をして神様へ反抗してはならぬ。こんな生意氣なことは許されない事だ。

さよなら大切にせよ。靜かに一切から解放されて休み給へ。

◆ 信 仰

惡虐無道として誰も排斥する足利尊氏も信仰の道に入り夢想國師によつて本當の心と呼びおこされた。即ち諸國に安國寺を建立し、一切經の淨書を計劃した。彼れが死ぬ四年前文和三年正月鎌倉五山を始め京都奈良其他近郷六十餘箇寺より數百の僧侶を集めて一切經淨書をなしお

寺へ納める事にした。この年三月末完成したといふ。

しかも毎巻の終り奥書として書いた文こそ全く懺悔の祈りである。曰く

發願文

願書藏經功德力 世々生々聞正法

頓悟無上菩提心 登佛果位酬聖德

後醍醐院證眞常 考妣二親成正覺

元弘以後戰亡魂 一切怨親委起度

四生六道盡汚恩 天下太平民樂業

文和三年甲子歲正月廿三日

征夷大將軍正二位源朝臣尊氏謹誌

しかも尊氏の二字は自筆のサインとなつて居る。人間は悪いとか善いとか云つても本當に心の底から悪いものではない。悟りがなく信仰がなく浅い智慧の働きて人生を考へるからの事だ信仰に根むさない懺悔は空であり、信仰なき生活は表面的である。

◆ 光は闇より

「線香花火の松葉が散つて闇に浮き出す顔と顔」

暗い中にピカツと光る一閃の美しさと強さ。明日をも知らぬ人間の運命を照らす神のみ恵の美しさと強さにも似て。

日中は一本の蠟燭の光、あるかなしかさへわからねど闇の中に於てはしるく光るものぞ。

盲人哲學者岩橋武夫氏の小著「光は闇より」を読む。

「つくづく自己の無力を感じた時、私はそこに自ら祈る心の出て来るのを覺えた。人の力なく、人の智慧でなく、より高いものに求むる心である。運命は人を裁きはするが決して最後まで人を殺すものではないといふ事がおぼろげにわかつた」と

現世しかも、物質的の利那的の感覺的の現實的のあるものに活きる者の淺ましさを思ふ。總べてがこの二つの肉眼で見えると思ふところに錯誤がある。岩橋氏は更に云ふ。

「肉眼の世界を以て愚かしくも之れが全部だと肯定する」と

心眼を開かねばならぬ。「本當に見ようとするれば眼を閉ぢよ。本當は聞かうとするれば耳を塞げ。」心の眼と心の耳のみが神と人との交りの道なのだ。

◆ 朗かに笑へ

あらゆる執着を去らねばならぬ。我利の衣と虚榮の服とをぬぎ捨てよ。隣りの庭の美しさにみとれるの愚を止めよ。己れ不相應の力を夢みるの愚を止めよ。あせり過ぎてはならぬ。あせらねばならぬ。あせりは進歩だ。しかしあせり過ぎてはならぬ。切符を買ふ時間違がなく、汽車へ乗る時間違さへなくば静に腰を下して居ても、汽車は目的地へ運んで呉れる。列車の中で尙走りつゞける様なあせりは醜い。運命の神は總べての人間に一つ一つ運命の籤をひかせる。其の籤には見掛け上の幸不幸がある。しかし幸と見え不幸と見えるのは己れの執着の醜い眼にうつるときにすぎた。達観すればすべて幸であり、すべて恩寵である。日が照るのも稲に必要であり、雨が降るのも稲に必要なのである。自然は朗かに笑つてゐる。ともすれば人事のみは醜い形をしゃうとする、あらゆる執着を去れ。そこに朗かな笑ひがある。

◆ 体 験

人間には時に悩みを樂む瞬間があるものだ。ロダンの藝術は醜悪の中に美を發見することにあつたといはれて居る。

肺に悩む彼れAは書いて居る

「發病以來數日は全く夢中で暮した。

しかし近頃になつて落着きを恢復して靜かに冥想に耽る様になつてから、何だかこの病氣になつたのが全くの自分の生活にとつて無意味な事ではない様な氣がし始めて來た。今迄は環境の進む限り人生航路の最も坦々とした道を自分も歩いて來た。

然し今日になつて一足その路の外に進行を避けて友の行くのを何かの理性を以て眺めて之を考へる時大きな疑問を抱かざるを得ない」と。

自分は先の日琉球へ渡る時、大嵐の中を船出して徹底的に酔ふた。然し酔ひの苦しみは初めの十時間位であつた。それからあきらめか、おちつきか、或はやけか、悩みの中に一種の悟

りが出来た。これも人生の一体験だ又と得られない船量の経験に感謝しなければならぬ。船量の心理生理を内観し研究してやらうなどといった大膽な心持にさへなつた。そうなると船の大きなピツチングが愉快なものとなり、もつと大きく揺られて見ればいゝなどと考へる様になつた。

悩みも亦感謝である。人間は喜びも悲しも總べてを己が体験の一プロセスとして楽しむ事が出来たらと常に思ふ。



◆ 獨身主義

娘は獨身を主張する。親は頻りに結婚をすゝめる。二十二歳。二十三歳。二十四歳。二十五歳。……………

親は結婚をすゝめなくなつた。娘は張合ひがなくなつた。つくづく寂しくなつて来る、今更逆戻りも出来ず。隠れん坊をした時巧みに隠れたはよいが、長い間鬼が来て呉れなかつたらさぞや寂しいものでせう。

◆ Y 子 様

御返事が後れてすみません。つい學年始めて忙しかつたし、其の上私軽い不眠症に悩みまし

たものですから、六日附の御手紙拜見し胸が一パイになり涙がとめ度もなく流れました。一年生を受持たれた上に五年以上全部の唱歌に高等科の家事まであつて三十時間ださうでございませぬ。學校出だての一女性をさりとはいはあまりの過重です。虚待です。私の血は一度は怒りに燃えたちました。だが。

Y子様、人を相手にせず天を相手にしませう。與へられた運命です。信じられたと喜びませう。試めされるところと思ひ換へませう。私はあなたの力とあなたの腕を信じます。失望しないでやつて下さい。一年の方は大体の躰のつくまで二ヶ月程ほんとに手が入ります。でも批把が黄くなる頃から其の方が多少樂になります。

Y子様、人間の力程不思議なものはありません。働かなくても日はたちます。働いて見ると自分にも驚く程力が出るものなのです。若き日の思ひ出に力一パイ働いて下さい。いつかおはなし申したでせう。私共の働きはいくら小くても大宇宙の進化に何程かの力となるのだと。ね働きませう。

時計が十二時をうちました。頭も疲れしました。ペンも走りません。もう休まないと又明日の

仕事が出来ません。あなたの御幸福を祈りつゝ筆を擱きます。

◆ 輕業を見る

普賢市の一日兒童を連れてサーカス團一座の輕業を見る。十一二歳位の少年尋常三四年位の子供が高い空中で色々のはなれ業をやる。片足で逆にさがつたり、飛行術といつて一方のブランコから他方のブランコへ飛び移つたりして觀客の膽を冷々せしめる。

技術の練習の効果の如何に恐るべきかを思はせると共にこうなるまでの隠れたる努力に敬意の念さへ湧く。僕の前任校にお伽噺の巧みな一少女が居た。尋常四年で級中でも小さい方であつた。お伽大會に屢舞台に立つた。之の子が出るといつも満場水を打つた様に靜まる。朝鮮からも再三招かれて出演した。京城で朝鮮王族の方に招かれる様になつた。人々は噺の天才だと稱讚した。母の曰く「あの子が一度舞臺へ上るのに一つの噺に六十回以上の練習をします。それでなければ決して本物になりません」と。練習の効果と思ひ、其の努力に敬意を拂はざるを得ない。天才といふも努力であり、眞面目な練習に過ぎない。

◆ 修 養

居る時は探し、居ない時は探さないものは何？。それは蚤だ。といふ謎がある。修養の深い人は尙修養の不足を啣ち、あまり修養の出来て居ない人は修養なんてしやうとも考へない。下關に永福寺といふ臨濟の禪寺がある。毎週月曜の晚臨濟録の提唱があつて參禪會が開かれてゐる。それに參列する人々は市長・判事・女學校長・旅團長・何々學士・紳商といつた所謂お歴々ばかり、一寸見にはもう大抵修養出来て居やうと思はれる人ばかりである。我々は己れ自身をもつと鋭く見つめなければならぬ。そして其の貧弱なあわれな醜き實相に恥ぢねばならぬ。昔希臘のデルファイにあつたアポロの神殿に書かれてゐた名句「汝自らを知れ」は永久吾人に反省を促して呉れる。ロングフェローの「Psalm of Life」の一節に

目指す行方は唯一路。快樂けらくにあらず苦にあらず。

明日は今日より向上の、我を認めむ努力のみ。

◆ 秘 密

世の中に秘密を作る程苦しい事は無い。虚心坦懐公明正大何の疚しいところもない人生がわたりたい。自己の思想感情行動一切を赤裸々に書いた日誌を誰に見られたとて一點の疚しさもない様な人生でありたい。西洋の格言に、

He can cover his crimes with stern looks.

人は厳格な顔をして其の罪を隠すことが出来るといふのである。醜い行爲を何知らぬ顔の下に隠す程なさないものはない。いやなもの秘密だ。秘密は作りたくないものだ。僕がある人へこんな事をはなしたら、其の人曰く「秘密のない人は人間としての背景がない」と、勿論僕も人間に背景の必要を否定しない。バックによつて繪が活きる様に、弾力ある人間とは背景の多い人間の謂で人間にバックの必要はいふまでもない。然し人に聞かれて困る様な秘密は人間の背景としては價値のないものなのだ。

秘密は個人に於て醜いのみでなく、団体間には醜い形となつてあらわれる。争が起つたり、

騒動が持ち上つたり、不和になつたり、反目したり、大抵原因は秘密の集積にある様だ。學校騒動なども大抵それなのだ。作るまじきは秘密だ。

◆ 變 節

横井小楠は意見を述べる時いつも云つた「今日はこう思ふが明日はどう考へが變るか知れない」と文學士篠原助市氏は近著批判的教育學の問題の序文の中に「私は自分の考へ方が固定しはしないかと言ふことを疑懼してゐる。一貫の態度を持つるといふこととの間に存する矛盾に私は絶えず悩まされて來た。折衷といふ魔の誘惑に身を委ねやうとした事も一再に止まらない」固定した思想程厄介なものはない。人間は瞬間々々が創造であり進化であり向上であるべき筈だ。隨て思想の變改進化は當然のことである。世には考へ方の改まるのを變節だ、無節操だと罵る者がある。變節無節操は進化すべき時進化しない人。罵らるゝ人に非ずして罵る人をこそ言ふべきである。

◆ 食はずぎらい

世の中には食はずぎらいといふ主義がある。そして食はずぎらい家といふ主義者が居る。教育上の新しい方法や研究など少しも試みもせず攻究もせずして、自己の捕はれた偏見——それは大抵やくざな考へであるが——でどうも虫がすかない。こんな事は危険だとか無價値だとか反對したがらる。これには全く困る。一体新しい主義や主張に對する人々の態度に二種ある。前からある事はよい事で新しい事は危険だと考へる傾きの者と、前からある事は大抵やくざなもので新しい事は進歩してゐるよいのだと考へる傾きの者である。前者は頑固な老人に多く、後者は輕薄な新人に多い。新舊思想の衝突は大抵こゝから起る。共に傾いては偏見だ世をあやまる眞理は中庸にある。古き人は新しきを研究せよ、新しき人は古きを質せよ。そこに常に新しき第三の道が生れる。食はずぎらひは大禁物だ。

◆ 平凡な事

ある本の中にこんな言葉がありました。

Don't try to do uncommon things but try to do common things uncommonly well.

「異常のことをしやうとするな、平凡な事を異常になせ」とでも云ふのでせう。よく峠や森などに千年も二千年もたつたと思はれる松や杉や楠などに七五三節がはられて神化されて立つて居るのを見る事があります。松杉楠等には何の見るべき點もない極平凡な木であります。朝顔やコスモス、ダリヤの美しさもなければ、橘や菊の氣高い香りもありません。而も千年一日の如く何を誇るでもなく雨に逢ひ風に逢ふても立ちつゞけた所に神となつた所以があるのだと信じます。美しいダリヤよりも、香高い菊よりも千年緑を變へない松こそ私共に尊い暗示を與へるではありませんか。

◆ 禁 酒

酒に酔ふた時人間は理性を失ふ——丁度戀に酔ふた時理性を失ふと同様に——理性を失ふと情意むき出しの行動となるから一見大膽に見え覇氣がある様に見える。酒を飲むのが英雄豪傑

の一資格でもある様に思ふのはこゝから來たあやまりである。近代の進歩した文化人に尙ほかうしたあやまりを先入觀念として持つて居る人があるから可笑しい。高杉東行が馬關の街を酒に酔ひ美妓の手をとり高下駄はいて濶歩したはなしは名高い。あの時代一般民衆のレベルの低かつた時代にはあゝして政治が出來たものだ。時代の轉廻を知らぬ人間では駄目だ。一代の成功者太陽堂主中山太一氏は近代の偉人である。大阪にある中山文化研究所は最も美しい社會教育の實蹟を擧げつゝある。太一氏の禁酒信條が面白い。二十一歳で禁酒した。「おれは三十になり一人前になるまで禁酒しやう、三十になつても一人前になれなかつたら、無期延期だとさめた」「酒をやめてもう二十五年。其の間一口だつて飲みませんまだ一人前の人間になれたと思ひませんから」「小金が出來た。商賣は繁盛するといふだけで、實業家になつたとはいへませんが一人前立派な人間になつたとはいへません。學者が研究して博士になつただけでは尙未成品です。政治家が大臣まで漕ぎつけた尙未成品です。本當の一人前といふのはそこに修養され陶冶された人格が伴ひ、その人格が其の人の力と渾一して活動するやうでなければ本當の一人前ではありません」「私は自らを未成品と信じて居る。まだ禁酒の無期延期をつゞけなければ

ばなりませぬ」米國がドライカントリーになつたのは唯の氣まぐれではない。原理がある。其の原理が恐ろしい。

◆ 時を惜しめ

「今日今日と暮せる今日の今の間も再び來べき時ならなくに」。(八田知紀)

人生七十古來稀と申します。長きに似て短きは私共の一生で御座います。昨日の窈窕たる美人も今日は白髮の老婆となります。唐詩選の白頭翁に代つて悲しむといふ詩に。

年年歲歲花相似 歲歲年年人不同

寄言全盛紅顏子 應憐半死白頭翁

此翁白頭真可憐 伊昔紅顏美少年

まことに早いものは光陰で、惜まねばならぬものは時間で御座います。茶根譚に。

天地有萬古。此身不再得。人生只百年。此日最易過。幸生此間者。不可不知有生之樂。

亦不可不德虛生之憂。

人生は再び繰り返す事は出来ません。希望に満ちた快活な若き日何事にも感激し易き乙女の時期は一度去つては又かへり來るものではありません。一旦嫁して妻となり、主婦となつては其の時々の務めも増して讀書などの時間もなくなります。もう少し勉めて置いたらとの悔をのこす事が多いもので御座います。

「若きときまなびよくせで白かみの、老いてくゆともかいのあらめや」(源成勝)

◆ 眼鏡を外して

自分には時々眼鏡を外して物を視る癖がある。眼鏡を外すと萬物がポーツとして明晰を缺く明晰を缺くと美しく見える。霧を透して見る谷に咲く山百合の美。煙の様な五月雨を透して見る庭のダリヤの美。夕べ闇の中から流れ來る尺八の音。或は三十間五十間離れた深緑の森の彼方から響くマンドリンの音。何れも何物かを隔てゝ居るが故に一層美化されてゐる。人を見るも同様、性格なり學識なり性質なりが隅から隅まで明瞭に見えすくと大抵の人は暗い影もあり醜い場面もあるものである。矢張眼鏡を外して朦朧とながめた時人間の美しきがある。薄くの

ばした白粉を透して見る女の顔色。鬢の後れ毛二三本風になぶらせた笑顔。モスの單衣ごしに見える肩の肉付。何れも美人に一層の趣を添える。吾人は時々眼鏡を外して自然や人事の万象を美化して見たいものである。

◆ 檜の森

美禰郡別府村の山奥に日本一の大きな檜の木がある。近く内務省より指定されて天然記念物特別保護法の恩恵を享くる事となつた。美禰線於福驛で汽車を下り嘉萬まで二里自動車がある之れから約一里東へ向つて田舎道をてくと道の側に「檜の森こゝから三町」といふ標札が立つてゐる。檜の木は竹やら杉やらの繁つた林の中で、下には大蛇も住みさうな大きな池があつて心細い程淋しい森の中に立つてゐる。周囲が大人の五抱へ二十五六尺ある。檜でこの位大きなのは日本には外にはないとは三好博士の説明だつたさうな。木の下に立つて見上ぐると千年一日の如く、雨風雪嵐に堪へて何を銜ふでなく、何を誇るでなく平々凡々に非凡の年月を重ね來つた其の努力に尊敬の心自ら湧く。更にかく大木となり老木となつても一枚々々の葉の先に

は伸びんとする生命の力が満ちく／＼と光つて居るのを見ると宇宙の神秘をしみ／＼感ずる。五十か六十かになれば老朽だの隠居だのとさわぐ人間にあの葉末から落つる雫を飲ましたら二十年や三十年の若返りはきつと請合ひだなど思ふ。平凡な事實に非凡な價値を與へるものは時間と努力だと思ふ。今から七百年程前に色定法師といふ僧があつた。二十九歳の四月に大藏經全部の筆寫を發願し四十二年間（七十歳まで）に五千四十八卷を筆寫し盡したといふ筑前續風土記に「起居動靜筆寫を事とし暫くも墨筆を放さず、道を行くにも机を首に掛けて書寫しける」とあるから其の努力は推してはかられる。一卷の字數を四千五百位として一日平均千六百五十宛書かれた事になるといふ根氣の強さ。精力の絶倫なる古來の逸話といへる。物集博士の廣文庫著述も色定法師の大藏經に刺戟されたものと云ふ。人間の中の色定法師は雜木林の中の檜の森に匹敵するものだ。

◆ 語學

某學者より語學をすゝめての手紙に曰く「語學は實に日本語を學んだ人の最も困難とする處

で若し吾人にして歐米の人と同一の國語を使つて居たら、餘力は必ずや彼等に劣らぬ研究をなさしめたでありませう。これは全く根氣ものです。急がずに絶えず御勉強なさい。専門の語學は何か一二冊辭書と首引きでやれば後は用語や型があつて読み易くなります。何時までもリダーみたいなのをやつても進みませぬ。ドイツ語は三年辛抱なさい(中略)いつまでも語學はすゝめませぬ。帝大出私大出師範出と申しましても人間には頭腦の差異は大してありません。普通以上の智能所有者の差異は語學だけです云々」と。

語學の必要を思ふ。時代は進んで來て居る。宗教家であらうが、教育者であらうが、新聞記者であらうが、藝術家であらうが、實業家であらうが、軍人であらうが、技術家であらうが、農夫であらうが、労働者であらうが、藝人であらうが、どんな仕事に携はるにしても人の先頭に立ち第一線に立つて働かうとする人は英語やドイツ語の一つ二つ出来なければならぬ世の中となつてゐる。

◇ 日 記

友よ。私共は私共のなす事はそれがたとへ小さき營みであるにしても、何等かの意味に於て自己の人生と交渉を持つものでなければなりません。まして相當多くの犠牲を拂ふ場合、一層かうした心掛けを必要とするのでせう。友よ。私共はともすれば毎日することに馴れてしまつて、無反省の裡に案外つまらない事を繰り返して居る事もあるものです。

友よ。日記を書いて居ませう。而してそれが果して己れの深められゆく人生の糧となりつゝ、ありやを考へて見た事がありますか。友よ。日記には幾つかの修養的意義のある事は先人が屢々教へて居ます。而して私は今一つ新しい意義を添加しようと存じます。友よ。私は日記は私共の人生をまともにうつす鏡だと考へたいと思ふのです。大きな姿見の前に立つた氣持で日記を書き度いと思ふのです。人は死ぬと閻魔大王の前にひき出される。そこには大きな姿見の鏡がある。之を淨玻璃の鏡といふ。人は誰も一度はこの鏡の前に立つのだそうです。そうすると人生の醜惡な場面がさながら如實に活動寫真か走馬燈の様にくつろぐのだと聞きました。顔をそむけずにも見得る人が幾人ありませうか。友よ。私は日記をこの鏡と思ひ度いのです。唯一日々々の記録であり、備忘録であつて何になりませう。隨て日記は一日々々の行爲や出來

事の記録であつては足りませぬ。實に心の日記でなければなりません。己れの反省己れの修養己れの精神生活を何の飾るところもなく赤裸々に記録しなければなりません。そしてそれが恥かしいなら、恥かしいなら。友よ。そこに日記が閻魔廳の淨玻璃の鏡となつて己れを攻めるではありませんか。

日記の前にぬかづく程の敬虔な修養を持たうではありませんか。外には寒い風が吹き荒ぶ、十六燭の電燈が明滅するの夜半、一日を反省しつゝ日記を書く時ペンの先きが走り濺る事はありませんか。書く字が灰色にかわる事はありませんか。あゝ己れを勵ますものは己れだ。

人生は結局一人ゆく旅だ。日記は己れの師だ。友よ。日記についても一度考へ直しませう。

◆ 境 遇

Hさん、境遇に支配されず、境遇を作るの覺悟で行つて下さい。ゆくところにあなたの世界があります。この間も私は唯一人で美禰郡の極田舎の方へ旅をした事がありました。春とはいへど、春寒とでも云ふのでせうか、冷い風が肌を氣味悪く刺す日でした。でも雲雀が一羽聲高

く啼つては居ました。てく／＼と田舎路を歩みながら考へた事でした。

人間は生存する限り常に境遇がつきまといふ。今の境遇に満足し得ないものは、何れの境遇にも満足し得ないものである。今の境遇に不満を持つ人は今の境遇を改善するの勇士である。而して今の境遇に満足する者は境遇に征伏された人である。ランプでは勉強出来ない人は電燈でも勉強し得ない人である。忙しくて本が讀めないといふ人は、閑でも讀めない人である。學校を遅刻する人は一里の遠くから來る人でなくて、學校の近くに下宿してゐる人である。境遇を征伏し、境遇から超越しなければ強く人生を歩む事は出来ない。境遇に作らるゝ人あり、人に作らるゝ境遇あり。

この間ある人からの便りの中に「こゝは田舎ですからランプなんで御座います。一人二階に上つて冷い床を延べてランプを消すと眞暗になる。其の時の恐ろしさ、だから何もかも片づけて床に入るばかりにして消すのでございますよ。消すとすぐ床にもぐり込み死んだ様な氣持で居ます。いつの間にか眠り朝日のさし込むのに目をさまし、まあ活きて居たかとうれしく起きるのですよ」とこの人も初めは大分悲觀して居たが今では不平を持たずやつて居る様

でうれしく存じて居ます。心の置き方如何で境遇は征伏されるものなのです。

◆ 乃木大將

九月十三日は乃木大將の殉死せられた命日であります。毎年この日を迎へると大將の遺徳がしみくと偲ばれます。其の偉大な光輝は年一年と光りを増す様に思はれます。大將の歌に

根も幹も枝ものこらず朽ち果てし、楠の薫の高くもあるかな。

といふのがあります。而して大將御自身も亦此の楠氏の精神其の儘をうけつがれたと申すべきであります。死後残された八千餘圓は六ヶ所へ寄贈されました。藏書千五百点は三ヶ所の圖書館へ寄贈されました。遺品三百八十六点は四ヶ所へ配贈されました。それから赤坂の自邸は其のまゝ、東京市へ寄贈され、伯爵と功一級とは一代きりのものとして返納を申出られました。二名の愛兒は既に國家の祭壇に獻ぜられてあります。自分及妻靜子の生命は明治大帝のみあと慕ひて獻上され、且屍体まで石黒軍醫の手に托して解剖臺上に寄贈され學術研究に役立つ様に申残されました。かくて大將は素裸でこの地上に忽然として生れ出て又素裸で否無の狀態で

此の世から去られました。實に美しいではありませんか。神様と云はずして何と申しませう。基督が聖靈を感じた處女マリヤに宿り、レバノンの山で磔刑になると屍体は其のまゝ昇天したと傳へられる有様とよく似て居るではありませんか。今夜大將の第十六回目の忌日を迎へて感慨深きものがあります。

◆ 辨 解

あさましい人間私共は悪い事をしては辯解をしつゞけて居ます。朝から晩まで私共のなした事、考へた事、言つた事、それ等を己れのとぎ澄まされた良心の鏡に照して見ると醜い限りである。しかし心の底ではいゝ加減の妥協と辯解とをくりかへしてゆく。

「なぜそんな悪い事をしましたか？。悪いと良いとがわからぬ事はなからう」

「誰々さんもしましたから」

「何て。人がしたらしてもよいといふ法はありません、それなら人が死ねばついて死にますか」と威丈高になつて叱りつける教師、冬の一夜己が胸に手を當て、靜かに己れの日々の罪業と

それに對する辯解とを意識し反省して見るがい。果して己れにはかうした辯解はないか。

「これ位は人もやることだ」「何だこれしきのこと」「あの人すら、聖人すら、君子人のあの人すら、あんな偉い人すら尙然りだ」曰く何、曰く何。他の罪を見ては己れの罪の辯解の材料にする。あさましい事だ。

◆ 爾

東洋一を誇る大阪府刑務所が堺市に出来上つて愈其の落成式が三月十七日盛大に舉行された大正七年以來の工事で總敷地十萬四千坪、工事豫算二百餘萬圓、而して收容人員三千九百名だといふ。而してこの工事の大部分は受刑者の勞力によつて出来たものだといふ。刑務所の大きな事が東洋一だといふ事が誇るべきものか否かは大に考へなければならぬが、それにもまして囚人の手によつて工事の大部分が出来上つたといふ事は面白い事だと思ふ。

囚人が自己の住ふべき家を造つたと考へれば唯それまでであるが、一枚々々の煉瓦を積みつゝも囚人の心理は如何に動くか。丈夫に丈夫に堅固に堅固にと監督されつゝ自己の收容さるゝ

場所を自己で組立つる悲愁如何にや。

蠶は口から糸を出して段々々と自己の巢を丈夫にする。糸を出すことが多ければ多い程繭は段々厚くなる。それはより更により更にと安全に己れの身を保護するものではあれど。私共は本を読めばよむ程段々段々とらへられて仕舞ふ。いはないでよい事をいひすぎては己れの世界を狭くする。——物言へば唇寒し秋の風——

◆ 缺乏の感謝

春休みの中に三日程妻等を郷里へ歸へして唯一人二階で原稿書きをした。不思議なことに朝晝夕一日に三度腹のすくのを感じた。しかも極めて厄介に意識的に感じた。平常こんな腹のすくのを厄介視した事はない。初めて台所にくすぶつて居る妻のありがたさを思ふ。

嘗てまだ獨身で下關のさる家の二階に下宿生活をしてゐた頃、風呂屋へ行かうとして懷中をふるふと二錢銅貨一つころがり出たゞけで外にない。一錢足りないために入浴出来なかつた事があつた。一錢の價值をしみじく味ふた事であつた。

教育の原稿ノ切が明日だ。おくれると編集部からおこごとを頂戴する。ペンの雫が半分しか出来てない。是非今夜は仕上げようと机についてあせる。外は風が荒れる。突然ボツと電燈が消える。待つてもつきさうもない。仕方なく蠟燭の火で仕事をつづける。火が消えた時火に感謝する。

齒の痛む時、世の中に齒の痛むといふ事だけ無かつたらさぞ幸福であらうなど考へた事があつた。

欠○乏○の○時○満○足○の○幸○福○を○羨○む○者○は○多○い○が○満○足○の○時○に○満○足○の○幸○福○を○感○謝○す○る○者○は○少○い○。

◆ わがまゝ

世の中には自分の思ふ様になる事と思ふ様にならぬ事とが半々にあるものなのです。なんでもかんでも自分の思ふ通りになるものだと思ふところに大きな失望と煩悶と不平との穴があるのです。我が儘とは世の中を總べて己れの思ふ通りに轉回させやうとして他人を犠牲にすることの謂なのです。

先日も何とかいふ名士が世相に憤慨して日本に住むのがイヤになつた。日本はこり／＼だと再三繰りかへしたら、外の人があ博士は一体日本人か米國人かと皮肉つたとかいふはなしです。そうかと思ふと私の友人某氏この頃ハガキをやつて「五月六月の日本は何と美しい輝かしいでせう。その感謝だけで日本に生れた幸福をしみ／＼喜んで居ます」と。

わがまゝ意識には悟りきらぬ若さの可憐がありますが可愛想です。も少し達観して居たいものです。ね、日々を感謝と喜悅と同情とに送りたいものです。

◆ 自 信

今上陛下皇太子であらせられ、歐洲御漫遊あそばした時の事であつた。御出發前大隈老侯が拜謁を仰付かつた。其の時老侯は老人の御注意までにと三つのことを申し上げられたといふ事である。

其の一。歐洲でどんな珍しいもの美しいもの大きなものを御覽遊ばしてもこれは驚いたといふ風をなさいますな。こんなものは日本には幾らもあるといふ御態度が必要です。其

の二。どんな場合でも側近の者に小聲で耳うちなさいますな。いつも堂々と大きな聲でおはなし掛けなさいませ。其の三。どんなところへ行かれても英語や佛語で挨拶なさいますな。いつも堂々と日本語でおはなしなさいませ。と申上げたといふはなしである。さすがに大隈老侯だ。其の識見は見上げたものだと思ふ。嘗て秋吉の本間俊平先生が伊藤公に會はれた事があつた。當時伊藤公は朝鮮統監であつた。公は非常に先生の人物に敬服して居られたので、統監府に出仕しないかと勧められた。ところが先生は「憲法を起草したり、朝鮮を統監したりなさるのは閣下の天職であり、青年や免囚の感化救済は私の使命であります。私が統監府へ出れば閣下代て私の今の仕事をやつて頂けませうか」といはれた。公もこれには感歎されたといふ。又「免囚保護など経済がうまくやれるか」と重ねて云はれたところ先生は「神の御用を勤めるのだから眼中経済などありません」と答へると公は「本間君は偉い」と三歎されたといふはなしである。

偉人とは自信の強い人だ。而して其の自信でぐんぐんと萬事をとりさばいてゆく。自信のないフラ／＼もあわれであるが、自信だと思ふ自惚と、自信だと思ふ頑固も亦あわれである。

◆ 堅 忍

壓倒せられてもつぶれるな、

踏みつけられても

齒をかみしめて堪へて居れ、

苦しいに相違ない

併し

辛抱せよ

古來の英雄偉人が

みんなその境遇を通つたのだ、

忍びぬけ

勝つにきまつて居るのだから。(靜香氏「權威」より)

人生を平凡に涉らうなんて虫がよすぎる。堅忍忍苦の苦しみ、これは我等に與へられた試練

でないか。齒をかみしめて戦ふそこに人生活の意義があるのでないか。平和の裏に戦あり、喜びの裏に忍苦あり、踏まれても踏みじられても伸びんとする道邊の雑草の強さを見よ。

◆ 時間勵行

世は進む、人生は忙しくなる。時間の價値は日一日と貴くなる。時間尊重及時刻勵行の必要を思ふや切なり。

昔は「時は金なり」などと時の價を金錢に比論して尊さをあらわしたものであるが、今では時ははるかに金錢より尊いと考ふべきであらう。

時をうまく活用し、無駄を省き生活の緊張を計るべきを思ふ。しかし時をうまく活用するのは朝から晩までシー／＼とあせり通す意味ではない。やる時に能率高くやるのは時間に餘裕を作る所とならねばならぬ。毎日三十分や一時間庭に出てラケットを振る位の餘裕と人間らしさを作るために他の時を能率高くやるでなければ不徹底なものである。

どうかすると時間勵行を口に唱へる人が間違ひをなすのを見る。例へば始める時間を五分か

十分かおくれるのをひどく氣にする者が、終りは三十分延びやうが一時間延びやうが平氣の平座といふ人がある。こんな人は時間勵行を口にする資格のない人である。時間は連続したものである。ある事の終りは次の事の始めである。終りが延んで平氣である人は初めを八釜敷いふ資格はない。

今一つ時間勵行について考ふべき事がある。あまり捕へられると人間が小くなるといふ事である。のんびりした豊かさが無くなるといふ事である。近來の教育にはよほど反省しないと教師が子供を小い小才子に作り上げる傾なきか、荒削の豊かな子供らしさたつぷりの子供こそ理想である。二つか三つでまだ片言さへるくに言へない幼児にお客さんがあると座敷に手をついて「今日は」「よくいらつしやいました」などと挨拶させて威張る親が有る。こましやくれの教育は大國民を作る所以でない。同様矢筈しく時間時間と騒ぐ時は人間を神經質に小才子に作り上げる弊なきか。結局は教育的識見のないところに原因するけれども、時間勵行の必要を思ひ方法の上に反省を加ふ。

◆ 感 激

實話——士官學校の教授の話——事實まのあたり見てのはなしである。

「先日士官學校の卒業式があつた。陛下には烈暑の中を馬に召されて分列式を行はせられた一通り式を終へさせられて、陛下は馬からお下りになると馬の肩のところを白い手袋のまゝで軽くボンボンと叩かれた。「きつかつただらうね」との思召であること勿論である」
はなしは唯これだけである。しかし陛下が馬から下りられて、其の愛馬をボン／＼と叩いて勞られる御心持の尊さ。愛、馬匹に及ぶ。私共は感激なしにこのはなしを聞き得ようか。私は目がしらのあつくなるを感じた。

◆ 我 執

私共はあまりにもものにこだわらず居ます。非常の偏見に執着して居てこれに氣付かないあわれなものです。私共は時に素裸になつて見なければなりません。これでよいのだと肯定す

る時あれではいけないのだと否定する時、其の肯定否定の規範をも一度疑つて見るだけの餘裕を必要とします。時々私共は己れ自身を放り出して客觀視しなければなりません。さうした時本當に其の醜さに顔を背けない人がありませうか。天が動くのだと思ふ人には地が動くとは思はれません。地が動くのだと思ふ人には天が動くのだとは思はれません。何れにも醜き我執があるのだが氣付かぬところに偏見があります。己を空しうするところが修養の第一歩です。

◆ み な 様

「頭は天にとゞいても足が大地を離れてはなりません」理想は高くも現實の事實に立脚しなければなりません。足が天地を離れると幽靈の様にフワ／＼になります。

理想にのみ活きる人は醒めた夢に失望し、現實にのみ活きる人は泥龜の様に四つ這ひになつてもがく者ですぞ。森の彼方に輝く最高最遠のあの明星にあなたの希望をつなぎ現實の大地をふみしめて一步一步と人生の長途をあせる事なく歩んで下さいませ。

あせり過ぎてはなりません。ひき伸ばされた宋人の苗は遂に枯れたではありませんか。毀譽

褒貶の小さい聲に迷ふの愚をやめねばなりません。完全は望むべく求む可らず。完全はものゝ終末ですからね。殊に教育にこの心得が必要です。一つの訓練でも完成するといふ事はありません。學校のある限り、子供の居る限り、繰り返し繰り返しするのが教育なのですもの。修養がいやになつた日あなたは峠の頂上に立つて居ます。讀書がうるさくなつたり日記を書くのが憶劫になつたり、努力がいやになつたりした日あなたは峠の頂上に立つてゐるのです。これからは下り坂ですよ。下り坂は樂だ、其の上速力も早い。然し私共は苦しくとも速力は鈍くとも上り坂を選びませう。人生は、向上の旅、旅ゆく、遍路なので、鈍くとも。

◆ 矛盾

米作豫想の第一回が發表された。内地六千六百余萬石の收穫で平年作に比して一割二分餘の大増收だとの豫想である。多收穫の競争が行はれたり、改良や研究が行はれる結果にもよるであらうが本年の天候が稲作に好都合であつた事が最大の原因であるといふ。

ところで全國でこれ程の大増收は嘗て見ない事であるが、この豫想が公表されるや米價はど

ん／＼下落し初め停止するところを知らぬ有様で、生糸慘落につぐ米價のこの慘落は農家に一大恐慌を巻きおこして居る。

經濟學者の發表によると一石三十圓であつたものが二十圓以下に下落して全國では六億圓の富の減少であるといふ。勿論物價は需要供給の經濟原則に支配されるので需要の伴はぬ供給過多が米價を下落せしむるに不思議も矛盾もない。しかしながら米が多く出來たが故に國富が減少したといふ論理にはどうも首肯出來ない不思議と矛盾とがある。物資が増す程富が減するどうもわからぬ事だ。貨幣價値に換算するところに無理があるのか、世の中はそうしたものなのか。

産業合理化が叫ばれて人間の能率が効率化し科學的管理による工場經營が行はれると少數の人力で多量の生産が出来る。隨て人間が過剰になる。即ち失業者が増す。いひかへたら産業の合理化科學化は失業者を増すといふ結果となる。こゝ等にも矛盾はないであらうか。——ドイツの産業合理化のすがたを研究した人の意見によると失業者を増すことはない云つては居るが——。

本を読む事深ければ深い程これに捕はれて外の意見や外の主張が聞えなくなるの矛盾はないか。それは深い井戸へ入る程益々あたりが暗くなると同様に。

本を読む事多ければ多い程、立場を失つて正しき方向がわからなくなるの矛盾はないか。それは太平洋へ出る程益々方向がわからなくなると同様に。

地位が高くなれば高くなる程謙遜と禮讓との心持を失ふの矛盾はないか。それは山へ登る事高い程うつむいて下を見下すと同様に。

學問する事深い程疑心の心が深くなつて信仰の世界から遠かるの矛盾はないか。それは大森林へ入る程天日を仰ぐことが出来なくなると同様に。

◆ 更 生

流れ流れて暫しも止む事なき時の流れに、年の暮だの正月だのと區切りをつけるのは、とも

すれば倦まんとする人間に時々更生の新生命をふきこまんとの用意である。

正月を迎へ、初春を迎へてはわれ／＼は己れの怠り心に活を入れて弾力ある次のスタートをきらねばならない。

一擧千里を翔る鵠鴻も尙ほ一翼一翼に新しき力をこめて、更に更にと登るではないか。この力ありてこそ燕雀安知鴻鵠之志のプライドを永久に持し得るのであらうに。ましてや烏鵲であり、燕雀であるもの層一層の力を双翼に加へて飛ばねばなるまい。

古き年の悔の追憶をかなぐり捨てよ。くよ／＼と逝きしものゝ上に未練の追憶をとゞむるをよせ。かくてすが／＼しき新春の陽をまともにうけて男らしく歩め、勇敢に更生の第一歩を踏み出せ。唯一度のみ許された人生でないか。

山野を蔽ふた雪もやがて消え去りて、香る大地の間に萬物生々の新芽をふく。あの黄金色に燃ゆる若葉に漂ふ希望を見よ。

時雨に吹雪に木枯にふき荒された雑木の林にも森にも春日和かに照してルビーの如き、エメラルドの如き春芽がほころび出すではないか。あの尖端に光る希望の色を見よ。

怒吼しては打ち寄せた大濤も小濤も、すべては昨日の夢と去りてひねもすのたりくとよする浪の間に見ゆる希望と幸福。

明日と言ふな未來と言ふな。今の刹那こそ更生の瞬間である。勇敢に第一步をふみ出せ。

◆ 伸 び よ

人間の中には五月雨の筍の様に威勢よくすく／＼と伸びつゝある者もあれば、いつまで経つてもいつまで経つても少しも伸びないばかりでなく、少し宛縮むのではないかと思はれる者もある。

伸びる者は内に潑刺たる元氣が充ちあふれて、しかもそれが無理をせず、靜かに外に力となつてあらわれて来る。伸びない者は徒らにあせるけれども内に力のこもつたものが無いから、外へ何の發展も来さない。隨て胸宇狭小、僅かな事にも怒り力もななくせに自負心のみ高く、内に謙虚の美が無いから人の言ふ事が耳に入らず、己れのみ高くとまるから人之に近づかず。求めて己れの墓穴を己れで掘る。かくてあせればあせる程其の姿は醜く世間は容れず、一人作

つた狭い世界に一人で立籠る。

伸びる者は之に反する。心はいつも朗かな秋の空の様に澄みきつて萬象を其の中に宿す。氣宇瀾達で一抹の塵さへ止めず、明鏡止水と澄める心は不平も煩悶も抱かず、理想は高きも心空なるが故に人の言よく身につく。謙讓の徳あるが故に人よく近づく。あせらぬから伸び方に無理がなく、いかにも大器となる。伸びよ伸びよ。

◆ 數ある小徑

數ある小徑はみだりにゆくな

最初の一足途には千里。

一日の計は晨にあり、一年の計は元旦にあり、一生の計は少年の時にあり。而してこの一ケ年の教員生活の計まさに四月にある筈だ。徒らに無計劃に最初の一步を踏み出してはならぬ。野にも山にも春陽がさして、櫻は開き土筆は頭をもたげ、夢の様な日が續くであらう。しかし徒らに酔ふた様な一日を送つはならぬ。靜かに沈思默考せよ。この一年我れは何をなすべきか

自己の修養に於て如何あるべきか。自己の研究に於て如何あるべきか。児童教育に於て、學級の經營に於て、教員としての生活に於て十分十二分に想を練り、企劃を立てなければならぬ。一日過ぎ、一月過ぎ、一學期過ぎ、一年過ぎ、一生亦徒らに過ぐ。神の恩寵に活くる生を唯徒ら事にしてはならぬ。數ある小徑はみだりにゆく。最初のワンステップこそ一生を決定するものなのだ。

◆ 年 の 甲

修學旅行前程天候に強い關心を持つ事はない。雨ではなからうか、風ではなからうか、暑くはないか、寒くはないか。而して之が豫想手掛りを氣象臺や測候所發表の天氣豫報に求めて大抵失望する。「測候所の天氣豫報は八卦位のものだ」といふ。「當るも八卦、當らぬも八卦」といふ諺がある。出鱈目のいゝ加減の事を言つても半分は當るものだと公算學は教へる。

明日は晴天だと毎日言つておくとしても六七割は當るにきまつて居る。これは晴天は雨天よりも多いのだから。ところで十中八九までも正しく當るものに老漁夫の豫想がある。まつ黒い

太い拳で水漬をかみながら「この風でこの雲行きじやあ、明日はひるまで降るがひるからは風が西にかわして霽れる」などといふが大抵當る。經驗は尊いものだ。天候は漁夫や船員にとつては生活問題だもの。毎日毎日幾度か空を眺めては觀測した。三十年も五十年もかうした經驗を繰り返した力は尊いものだ。

烏賊の甲より年の甲。

◆ 悔 ひ

我々は毎日々々悔ひに悩まされて暮す。結局は明日を知り、昨日を見るの叡智の不足に原因するのだけれども。考へて見れば悔ひは弱者のよわ音である。自信を以て大膽に渡れば悔も惱みもけとばされる筈。

病めるAさんの手紙の端に。

「毎日を本氣で誤りなく生きて行かうと希ひながらも又しては同じ悔を重ねて仕舞ひます。体の調子がいゝと言つて、早速畑をほつたり、草をむしつたり。今まで幾度となくかうした

事を繰返し其の結果は分り過ぎる程分つてゐる筈で御座いますのに。其の時々の小さな感情に溺れてつい知らず識らずの間にかうした誤りを繰返して仕舞ひます。透徹した叡智が欲しいと強く思ひます」

一時の悔は一日の悔、一日の悔は一週の悔、一週の悔は一月一年の悔、やがて一生の悔である。悔を悔と思はぬ頭も悲しいが、何事をも悔いて悩むも亦悲しい。



教 育

◇ フレーベル先生

今年尋常一年の長男がフレーベル先生と口ずさんで居るから、

「フレーベル先生で誰だ」と問ふたら

「幼稚園を作つた先生だ」と答へる。

「フレーベル先生の事で何か知つてる？」と聞いたら、

「フレーベル先生のお墓はおもちやの積木の様に出来てゐる」と言ふ。

「そんな事誰に聞いた？」といふと、

「本で讀んだ」と言つて繪雑誌コードモノクニを示した。

なるほど岸邊幼稚園長がフレーベル先生の墓の前にぬかづいて居る繪が

あつて片假名で簡単な説明がしてある。

此の頃小學校兒童が課外讀物からどんな影響を受けつゝあるかの調査中である。近頃の子供は澤山の雑誌や本を読む。成城の小原主事の談に一ケ年に四百冊位讀んだ子供さへ居るといふ事である。色々の意味に於て大きな影響をうけつゝある。勿論良影響のみではない、悪い影響もあると思はれる。繪雑誌の撰擇などかなり大切な問題だと思はれる。

◇ 三 月

又三月が來た。不思議な事に一年に一回必ず時を違へず三月が廻つて來る。陽は一日々暖くなる。桃が開き、櫻が蕾をきり、土筆があたまをもたげる。自然は陽氣な春に向ふ。でもこの月位自分の感情の高ぶる特別な月はない。卒業生を送る、卒業生と別れる。

袖振り合ふも他生の縁。一寸路上で會つて談す人と人さへ何かの縁のむすばれだと思ふ。まして一年でも半年でも師となり弟となるのは唯の偶然ではない。前生からの深い約束事に違ひない。

いとしき兒よ、雄々しく

彼岸の光明にむかつて おゝ

おまへたちの すべての

力をつくせ。

と力強い語調で送り出せど、さてこれが離別かと思ふと胸が一パイになる。

「先生、母に死なれた私は下關の家をたゝんで遠い茨城の姉の内に厄介になります。これから流浪する身でございます。又どこでお目にかゝれるか知れません。もう永久お目にかゝる事が出来ないかも知れません。いくら遠くになりましたもどうぞお忘れなく相變らずお導き下さいませ」

これは自分が六七年前に教へた一少女節子さんからの最近のたよりの一節である。母一人娘一人の節子さんは母に逝かれて本當に途方に暮れたのであつた。世の中に離別ほどの悲しみはない。三月を祝ひ、三月を呪ふ。

◇ 一生の一生も

私の日記のある頁をくる。

「一生に唯一人でよい、教育がしたい。許されぬ願ひかしら」と書いてある。十三年のこし方をふりかへると感慨無量、教場で教へた兒童は約四百六十位居る。年賀状をよこす子供も年々五六十は居る。でも唯一人でも本當の教育をしたのかしら。一人人を教育しやうなんと考へるのが間違つてゐるのかしら。それとも俺の熱心俺の愛俺の人格それが到底人を教育するだけの力がないのかしら。そこに遊べる九十九匹の羊をおいて、迷へる一匹の羊を追ふてさまよふ羊飼の心になつて、唯一人でよい、本當の教育がしたい。

◇ 深紅の薔薇

のべんにはあまりに悲し我が思ひ
深紅の薔薇を一枝描きつ。

一少女M子は六年の優等生であつた。卒業する二三日前「先生卒業のかたみにバラの繪を一枚書いて下さい」とねだつた。「きつと書いて上げます」と約束した。半年の後M子は肺の病で重い床に就いた。年は暮れて又年が明けた。M子は桃の花咲く頃淋く逝いた。某人の歌に
逝く春や、眞紅の花に見入りつゝ、
肺に失せにし友懐ふかな。

果敢かりしM子の生を吊ひ、兼ての約束を思ひ出して畫筆をとつた。血の滴る様な眞紅のバラが一枝出来上つた。送る人なく永久の紀念となつた。

◇ 旅 人

今から旅をするのだと言つて家を出たが、行く目的地はきめて居らず、旅費の持ち合せは勘定してゐない愚かな人が居た。東行きの汽車に乗つたり、西行きの自動車に乗つたり、今日は東明日は西と漂浪の旅をつゞけて居る、いつまでたつても落付く日は來ず、旅費はつきる。教育をするのだと力んで旅出はしたが人生に對する目的觀は立たず、自己の力や子供の能力につ

いての信念もない初等教育者といふ人の一群が居た。奈良行き、別府行き、汽車に乗つたり、目當定めぬさすらひをして居る。こうなると十年一日の如く同じ家に立籠つて旅をするなどと考へても見ない中等教員などいふ人の方がえらいのかも知れない。

◇ 教育の原理

四月一日と二日福岡醫科大學精神科講堂で開かれた第二十四回日本神經學會に出席して六十幾つの研究發表を聴くの機會を得た。中に十二三の心理學的材があつたが、其の外は全部神經病理に關するものであつた。それ等は専門を異にするので殆んどわからなかつた。特にドイツ語を連發してゆく間に學說だの研究だのといふものがあるのだから全くやりきれない。發表者の中三分の一約二十人は専門の博士で、其の他は大抵醫學士、心理學方面の文學士を二三交へて居た。

人の肉體の生理的物理化學的方面を主として取扱ふ醫學にこれ程の専門の識見を必要とし、唯一人稀有の變症者を發見してもこれに一年も二年もかゝつて研究したり治療したりする。そ

れに身心兩方面、進んでは靈の方面にまでもつき進まなければならぬ教育の仕事があまりに上りであり常識的である感がしてならぬ。多くの教育家は唯上等の常識才智でごまかしてゆく現狀がなさない。醫學に多くの分科があつて毎年かうした大會を開いて研究發表をなし幾百の問題が討議される様に教育にもかうした機會がなければならぬ。今のところ日本兒童學會の大會か心理學會の總會があるがそれとて毎回専門家二三の發表に過ぎぬ。東京高師附屬の全國訓導協議會が稍これに近い。しかしあれも發表の内容が何だか物足りない様に思はれる。勿論教育は醫術よりも更に至難な事業なのだから、これまでに研究された力では本當のところまでつき進んで居ないからでもあると思はれる。これは一方に於て教育が哲學から患されてゐることを否定することは出来ない。教育が思辨的となり主觀的となつた事が當爲の探究に走せすぎ、現實の顧慮と反省とに不足を來した事が明である。頭は天を望むべきも足が地を離れては嘘だ。も少し方法原理が科學的組織に進まねばならぬ。四月の教育研究で日田主事曰く。

吾人は「あるべき」當爲の暗示を鍊達堪能なる先達者の體驗に求めると同時に之を實現すべき「あるがまゝ」の子供の現實を明にせねばならぬ。それは外でもない教育の實驗的研究で

ある。この方面の研究は當然なすべきことで我國に於ても既に早くより其の必要は主張せられながら未だ吾々の實地教育の基礎とするに足る實績は擧つて居ない。然しながら心身兩方面に亘つて各種の問題につき着々有望なる調査研究が着手せられつゝあることは事實である。我教育界は將來この方面の研究に根本的計劃を立て横に多數の研究者を得ると共に縦に永く之を繼續して確實なる資料を蒐集せねばならぬ。

吾人は東京高師附屬小學校の諸君の健闘を祈ると共に少し教育が科學的に深入りすべき筈なることを痛感する。

◇ 子供の道德意識

それは水仙の匂ふ小春の日の事であつた。小さい二人の子供が日當りのいゝ様で遊んで居たが妹の桃江が椽のふちへ手をつき外したと見る間もアハヤ、くりつと一轉して敷石の上で脊中をしたゝか打つて、更に一轉して下の庭に轉び落ちた。——余も妻もや落ちたと叫びつゝ走り行く——桃江は泣きもせず、クリツと坐つて手の塵を拂ひつゝ、

モ、チャン、カチコイカラナカンノ、

と、妻が「まあ賢い〜」とくりかへしつゝ抱き上げるとワーンと泣き出した。それまで泣かなかつたのは格別の打撲も無かつたからであらう。しかし第一聲として賢いから泣かないといふのは面白い。幼年の道德意識の萌芽である。桃江は今一年十一月である。

(二月末育兒記録より)

◇ 小事

小事だといふな。小事にも大きな影がある。消えるものだと思つてはならぬ。如何に小さい出来事も久遠に宇宙に影を残すものだ。決して消え去るものではない。小さい悪が恐ろしいと同様に小さい善の尊さもそこにある。

水仙の匂ふ一月の末の或る日、圖畫の時間、兒童と共に靜物の寫生をした。先生も一枚書き上げた。ところがうまく出来ない。ツイいやになつてパリツと裂いた。子供の前で。

二三日して兒童の一人が圖畫の出来の悪いのを先生の前で裂き捨てた。

先生ギクリとした。しかしもう遅い。數日前に示した先生の模範……小事だと思つた事が……かうして子供等の上に永久消えない大きな影を残して居る。小事の無限性の恐ろしさ。教育者の一言一行に極めて微細な慎しみの必要なる事が今更の様に教へられる。

◆ 一圓の小爲替券

今から十二年程前に下關の玉江小學校で六年を卒業させた一人の生徒好川君から數日前一封の手紙がとゞく。かなり長い手紙と一圓の小爲替券とが入つてあつた。其の文に。

(前畧) さて長らく先生方の御世話にあづかり絶えず御激励と御鞭撻とを賜はり候御蔭にて私事去る三月漸く學業を一先づ終る事を得候段深く感謝仕り候。卒業後大藏省へ奉職奉り度豫て存じ居候昨年文官高等試験受験仕り候も見事に破れ止むを得ず、民間銀行を選び、住友に入社する事に相成今般住友信託株式の調査課に務むることに相成り候て毎日金融界の調査に従事仕り居り郊外の一小村にて下宿生活仕り居り候。早く御報申上べきのところ初めての奉公で疲れて新聞すら手に得ざる次第にて延引仕り候何卒悪しからず御宥し願上候。就ては

漸く極めて僅かには候へども給料を受くる身分に相成候間初月給の中の一部を割きて何かを御前に捧げ度いと存じ候も只今財界動搖多忙にて到底外出致兼候間、甚だ失禮に候へども小爲替にて差上候何卒私の微意のある處御扱みとり下され度伏して願上候。尙今後も一層御指導と御愛顧とを賜はり度此際特に御願ひ申上候云々 下畧

好川君は私の教へたクラスの優等生であつた。幼い時一方の眼に怪我をして失明して一眼しかない氣の毒な可愛い少年であつた。豊浦中學から山口高等學校を経て東大法科へ入つたのだ。そして些の故障もなく順潮に進んで此の三月卒業したのだ。自分の教へた中で帝人を出るのは好川が最初だ。好川は四季折々に時候見舞の手紙をよこす。其の度に必ず「先生相變らず御勉強ですか」云々と書く。自分はいつも好川から勵まされてゐた。生徒を知るものは先生だ。先生を知るものは生徒だ。かくて互に勵ましつゝ十幾年が走つた。この人こそ我が弟子の一人だと云へると思ふ。自分はこの小爲替券を手につつたまゝ追懐は一昔の前まで無量の感慨にうたれたものであつた。他の如何なる手段で得た千圓の金よりもこの一圓の小爲替券は尊いのだ。ふり向いて自分が教育者だといふ事をはつきり意識した。

◆ 怪げな日本人の能力

米國ニューヨークタイムス社發行の Current History といへば世界的の外交雜誌である。其の五月號に東京通信社マセソン氏の一文 The myth of Japanese Efficiency (怪げな日本人の能力が載せられた。間もなく大阪毎日新聞は社説に於てこのマセソン氏の文を基として評論を書いた。自分はこのマセソン氏の全文を読み度いと願つてゐた。この頃幸全文を見る機會を得た。隨分日本人を赤裸々に無遠慮に卒直に非難したものである。しかしマセソン氏は大正七年以來日本に居る記者で日本語も語り日本の家屋に住む位の日本通なので、そのいふところ考へさせられるものが多い。甚だ見當違ひだと思ふ点もあるが他山の石として聞くべきものも亦少からずある。

先づ文の書き出しに於て「今日の世界で最も荒唐無稽なことは日本が一大強國であるといふ話である。之を最も深く信じて居る者が日本人自身なのだから堪らない」とこきおとし「正直の處所謂大國としての日本は譬へば今にも破裂しさうに張りきつた風船玉である」とも書いて

る。第二は獨創力なき國民として「個人として能率が低く物を學ぶに遲鈍であり、獨創考案の才なく、何事も手を取つて導かねば出来ない人間である。其辭曰惚心が非常に強く、根本的に新思想の受入れを頑強に排してゐる」次に不景氣の襲來といふ條下には「日本人は収入の少いくせに贅澤であり、勞働者は能率の低いくせに高價の賃金を食ひ云々」と。服従を基礎とする社會といふ條下には「日本の政治並に社會組織は服従を以て基礎としてゐる(中略)此の結果國民は何をなせ、何時なせと命令されねば何事もなさぬ國民となつて仕舞ひ……春秋二季の大掃除さへ先づ巡查が人民に告知し、其後再び検査にゆく……かくて務めて人民に自己の考へを出させぬ様にして居る」それから關東の大震災。繁文縟禮、機械の酷使、世間知らずの日本人考へない學問、日本が開戦したら等の條がある、「動物や子供と同様機械も亦過勞させられて居る。機械は經濟能率以上に酷使されてはならぬといふことを普通の日本人技師は知らない」「彼等は毎日毎週毎月國內に洪水の如く流るゝ刊行物により各種の題下に自分等は優秀な頭痛と勇氣とを有して居ると教へられてゐる。一体日本人は「考へる」様に教育されて居ない。又「考へることを許されない」等々。肯綮に當つてゐるもの、見當大外れのもの様々。されど日

本人たるもの自惚れたり、うてうてんになつてうかれたり或は又憂鬱になつたりする前に退いて三省しなければなるまい。

◆ アンチチイク

近時智育偏重の反動としてアンチ智育の聲が頗る高い。鯨鯨教育で頭ばかり太くなる教育が本當の人間らしい人間を作る所以でない事は餘りに明瞭である。十九世紀の偏智思想の餘影をうけて教育があまりに偏した。ヘルバルトの表象心理説に教育は大に禍された。もつと手の人腕の人働きの人を要求する。教育が教室から作業場へ、ペンとインクとが鉋と鋤とへむかはねばならぬ事勿論である。しかし茲に考へねばならぬ事はアンチチイクは智育が徹底したからもつと軽くしてよいといふ意味は少しも含まない事である。これで智育が充分だとか、これで相當徹底したのなど考へたら大きな間違である。まだく智育方面も大に不徹底である。更にく智育は徹底しなければならぬ。唯偏智を忌むのである。アンチチイクは智育が徹底したから起つた聲ではなくて他の方面道德教育や藝術教育や作業教育が軽んじられたから起つたのだ

といふ事を呉々も忘れてはならないと思ふ。

◆ 立聞き

母 「スポーツちうのは何のことかい？」

子供 「スポーツちや菓子よ、キヤラメルの様な箱入りの菓子よ」

母 「そうか、ちやエレベーターといふのも菓子かい」

子供 「いゝやエレベーターは菓子じやなからう」

姉 「馬鹿！ スポーツちうのは本當は菓子の事じやないんだよ」

母 「あれいなは皆英語じやろうのう」

兄 「何！皆日本語だい」

×

×

×

主婦之友九月號の石上欣哉の文の一節より。

「時代的な餘りに時代的なモダンの絶頂はモボの斷髪に襟あしの傳統美をサラリと剃りすて

モボのセイラーパンツにベージュメントの埃を前後左右に蹴立て、ゆくが地球は廻る。モボのオールバックもまたロイド眼鏡もモガの跳ねかへるワンピースも「エツへ時代錯誤だよ」とうそぶく一群が生れた。云々下略」

運轉手「このコードをつなぎかへてセカンドワイヤーとサードワイヤーとチェンジするとフルスピードでゴーバックします」

日本語ではなすのか英語ではなすのかわからなくなる。

×

×

×

交通が漸次發達し、文化文明が接近すると世界のことばは遂に共通になる運命を持つと考へる自分は中學校—中堅國民を養成すべき—に外國語を減するなどお目度い近眼者流の考へ方だと思ふ。日本人の思想は日本語で堅めると堅固だと考へる。世界の片隅に小さくなつて居るみじめな形よ。日本國外に一步出て日本語がどれだけつかわれる。狭い割據根性は禁物だ。

洋服着て靴はいて、電燈をつけ自動車に乗り汽車に乗り、汽車の食堂で洋食を食ふ紳士曰く

「どうも外國語をやると日本本來の精神を失ひますから危険です」と聞いてあきれる。最高學府たる大學内の講義も日本古典の研究其他二三の外は全部歐語の書籍が中心でやられてゐるといふ。妙な皮肉だ。よつほど問題は深い。理屈だけでなく事實の世相に立脚しない考へ方は空だ。

◆ 學校小屋

玖珂郡高根村へ指導のために來て呉れとの事であつた。岩國の町から十四里二時間半程自動車に揺られながら岩國川の左岸に沿ふて上ると高根村の終點宇佐郷といふところに着く。そこで自動車を下りそれから又二里余の登りを谷に添ふてくると宇佐といふ部落へつく。こゝは寂地山麓で一峠越せば右は廣島縣左は島根縣といふところである。寂地といへば子供の時よく聞いた名である。なんでも日本の國の奥の奥で鬼でも出る山位に聞いてゐた。其の山の麓へ來たのである。

案内せられるまゝに學校にゆく。屋根は杉皮葺きで天井が張つてない。まわりは荒壁のまゝ

に紙張りの障子。暗い事それに教室の中はと見ると前に黒板が二枚吊つてある外は子供の机腰掛と冬期保温用の大火鉢が二つ隅の方に置いてあるだけである。

「この邊の子供は一度も硝子障子の教室で勉強する事は出来ません」とある先生が淋しさに笑つて居られた。三十幾人の五六年生の中に汽車を見た事のある子が四人あるとの事。それでも中部地方の鐵道は？と聞かれると「東海道線・中央線・北陸線・信越線」と流暢に答へて居た。或る感慨にうたれて校舎の前に立つと大阪の久寶、汎愛、船場等のあの四階五階の鐵筋コンクリートの堂々たる校舎の幻がうかぶ。この校舎ではそこ等の學校の便所一つ、小使室一つの費用もかゝつて居ないであらう。

中では同じ國民教育が行はれて居れど。

◆ 一女教師の自殺

本年一月十七日鎌倉の某小學校で女教師太田靜子(一九)が昇汞水を多量に飲んで自殺を企てたといふ記事が多くの新聞に出た。而して其の原因については次の様な事が書いてあつた。

「太田は今春神奈川女子師範を優等で卒業した秀才で、就職の際はあちこちの小學校がこれをとるために競争をした程の者であつた。それが右の小學校へ奉職し尋四を受持つたのであつたが成績が上らないのに悲觀して自殺を企てたものである」と。

十一月の教育週報でさる人が右の事實を基にしてかなり長く評論をして居る。評論するに價せぬ事件であるとも云へるが、又考へ方によつては随分教へられるものを含んで居る。自分も特別の興味を以てその評論を読んだ。今自分は茲でそれについて所見を書かうとするものでない。自殺者の心理は自殺した者より外にはわからない。死の眞因は新聞面通りではなくて誰も知らぬ第二第三の原因があつたかも知れない。然し今は新聞や雑誌の報するものを眞とする外ないが、若し果してそれを眞なりとすれば自分はこの人の智慮の足りなさや自惚の強さと虚榮の強さと而してあまりに結論づけの輕卒さを氣の毒に思ふものである。學級を受持つて半歳たつたかたゝぬかに成績が學らないとて死ぬなんてあまりに輕卒だ。一体教育などがそんなに手輕に兎や角なるものと思つて居たのだらうか。「優等で卒業した秀才」とは何のことだ。試験の點だけで人間を秀才などとおだてゝはかうした失敗をまねく。自分はこの女性の自責

の念には敬意を拂ふが同時に其の無智に同情する。

◆ 巢立つ雛

幾年か海の岸の大きな樟の林に巣くひ育てられた鳳の雛、春陽うららかな中に勇ましく羽ばたきしてスタートをきる。不安な眼付きして看守の親鳥の愉悅と満足。

「汝がゆく大空は果しもなくひろがりて、紺碧の銀河にもつゞくものぞ、汝がゆく世界に自由の廣さあれど、わけもなく複雑な相を有し、解いても解いても解けない謎を隠すものぞ、兩翼に力一パイの精をこめてあせる事なく大きな羽ばたきしてゆけよ。決して振り向くまいぞ。親はいつまでもいつまでも汝がゆく羽音と姿とを看守るであらう程に。空は廣い、風もあらう、雨もあらう、雪もあらう、時には暴風暴雨の荒れもあらう。されど汝が翼にはもう充分にこれ等に堪へる力と熱とはあるのだ。唯意氣と我慢とでのりきれよ。ゆけ。すこやかに幸多く」かくて百八十の姿勇ましくスタートをきる。神輿にゐまして、ゆく道を守りませ。

◆ 竹本みき子

死してゆくのは美しい浄土への更生であるかも知れない。理屈はどんなにもつけられる。しかし死は哀しい。死は悼ましい。人間世界に於ては誰の上にも一度来る約束ではあるけれどもお父さんからうたれた「タケモトミキコッス」の電報をうけとつて私は文字通り茫然自失なすところを知らぬ有様であつた。

螢雪四年の學業功なりて、師範學校の卒業證書と本科正教員だといふ免許狀とを携へて意氣揚々と郷里阿川へ歸つたのは春まだうすら寒き三月の二十三日の事であつた。二十日足らずの後にはもう幽明境を異にして居ようとは考へても考へきれない嘘の様な事實であつた。三月二十六日に出したハガキには

年月の過ぎゆくのはほんとに夢の間でした。そして五ヶ年前希望と憧憬とを胸にひめて入學したのでした。それが最早卒業なんて、その間直接に又間接にお世話下さいました事を厚く感謝してゐます。

先生歸省致しましてより毎日不安な日ばかりです。いろ／＼と學校名をいつては空想を描いてゐます。しかしどこでもいゝといふ心情が心の奥でします。云々。

と書いてあつた。それから四月一日によこしたハガキには（これは多分床の中で書いたもので絶筆であらう）

（前略）私歸省する時室積の風を持つて歸り毎日病床です!!。もう寢床の中もあき／＼になつて來ました。私の新任する學校は川中だそうです。まだ行き得ませんが五日間の中にはどうかして行かうと思ひます。

死の床にある身も尙ほ五日間に赴任するなど責任感を書き示して居る。

竹本さんは身体も丈夫さうだつたし、水泳の選手でサツバリしたスポーツマンライキな快活さの持主できつとよい教師になれると心頼みにしてゐたのに惜しい事であつた。昨年森田利子さんを失ひ今この人を失ふ。あきらめようとしてあきらめられない淋しさである。残られて御両親のお歎き如何かとお察し出来る。合掌冥福を祈る。

◆ 會 話

時。 六月中旬山の新緑愈濃く雨あがりのくつきり霽れた日の午後

場所。 田舎町小學校の應接室

人物。 九州南部の田舎の校長——年の頃五十位顔の四角な人。之と對座せるは三十余の若い訓導。

△「縣の命で個性調査について調査にまゐりました。何分宜しく」

○「さうですか、よくいらつしやいました」

△「あなたは個性調査はいつから御實施になつてゐられますか」

○「私は師範學校を卒業して一學級を預るとすぐからやつてゐます」

△「へえ！随分昔からですね」

こゝ校長大分感心した態度。個性調査とは何か特別かわつた事件かのように思ふらしい」

○「あなたの縣では兒童の教育するのに個性調査をしないのですか」

こゝ訓導一寸皮肉な逆襲をしたつもり、しかし相手にはとんとわからんらしい

△「大体しない様ですね。あなたの個性調査の授業を一時間参観させていただきますが、
訓導一寸けさんの顔をする。個性調査の授業!! この人は個性調査とはダルトンプランとか
ウイネツカシステムの様なかわつた教式の名とでも考へてるのかな變な事だと思ふ。訓導し
かつめらしく。」

○「さあどうぞ御参観下さい」

◆ 母

鶴見祐輔著「母」を読む。

母には進といふ俊才の一少年が居る。

小學校の成績拔群首席つゞけの彼れは或る日、母に學技へ行くのは苦痛だ學校へ行くのは全
く厭だと訴へる。母はこの意外の言葉を聞かされて我が耳を疑ふ程驚く。

進は言ふ「小學校程馬鹿なところはな。先生はわかりきつた事をくどくどと繰返し教へる
何時間も何時間もお行儀よく机について居なければならぬのは獄屋程の苦しみだ」と。

著者は小説の進の口を借りて現代の教育へ二つの大きな皮肉と警告とを發して居る「先生は
わかりきつた事をくどくどと教へる。行儀よく机につくのは苦しみだ」と。

現代の教育はたしかにかうした警告を甘んじて受けねばならぬ實狀である。一年生の中には
入學する時既に二十迄の數の理解ある者、假名五十字の讀める者いつも若干は居る。一年を
終了して二年へ進める時教師は己れの教育した事について鋭く己れを反省して見なければなる
まい。兒童が學校を楽しい所と思ふのは十五分の休憩時間があるからだと思ふのではなからう
か。

◆ 感化の力

伊藤公在世の頃新渡戸博士が訪問されて

「あなたは永い公職の間に各國の人々にお會ひになりましたらうが、其の中にこの人は人並優
れた偉人だと思召した事がありますか、必ずおありでせう、どういふ人でありますか」と質問
された事があつた。ところが公は暫く躊躇されて居たが、ポツ／＼と語り出されたところは實

に意外であつた。

「我が輩が幼少の頃に村におつた村の寺小屋の何某こそ最も偉い人物だと思つた。其の人の教へは今あれかれと思ひ浮べる事は出来ないけれども大体に於て自分の心に染み込んで今尙あれは偉い先生だと尊敬の念を禁ずる事が出来ない。それに我輩の尊敬するのはやはり自分の両親である。勿論名もなき身分の低いものであつたが自分にとりては偉大な感化を與へて呉れた。父は放膽な人で我輩に「おぬしは何所に行つて野垂死をしても構ふことはない、なんでもいゝから思ひ切つた事をやれ」といふやうな事を始終聞かして呉れたが自分もさういふ肌合の男となつた。それに母は又反對に氣の小さい心配性の人であつた。一寸風が吹いても風邪をひきはせぬかと氣遣つて呉れるといふ風であつた。自分にはこの母の性格も亦入つて居る。大膽にやる前に細心の注意をする様になつたのは両親の心が我輩の心の中に動いて居るやうな心地がする云々」と。

これは新渡戸博士が大阪毎日新聞に執筆して居られる偉人群像の中で書かれたもので、博士は自分が實地公に面接された時の思ひ出だから偽りではない。

私はこゝを讀んで最も深く考へさせられた。伊藤公が一生に會はれた最も尊敬する偉い人として村の寺小屋のお師匠さんと両親とを挙げられたのは私共を感奮せしめるではありませんか。公は明治の始め以來幾回か歐米にも行かれたし、我國を訪ふた世界各国の第一流の人にも會つて居られる。しかも最も尊敬する人として寺小屋の師匠と両親をあげられた。人間を感化するものは位や地位や勳章や俸給や金錢や手腕や學力や辯力やこんなものではない。もつと違つたものである。

◆ 象牙の塔より

この頃思ふ。それが何が原因といふ事はわからぬ。隨てどこかと聞かれてこゝがとはつきり答へる事は勿論出来ない。どんな風に？と聞かれてもこんななどと答へる事は出来ない。唯漠然と夢の様に思ふまでのことだ。勿論當らぬかも知れない。當らぬ方がいゝ様にも思へるし當つて居て改善さるゝ方がいゝ様にも思へる。兎に角夢の様にポーツとした幻にすぎないのだから勿論責任はない。責任は負はない。責任を負へと言はれたら負はぬとは云はぬ。しかし負

ふ方法がない。たとへ私が責任を負ふてもこれがよくも悪くもなるのではない。さて思ふとは何か。

どうも教育が——この頃の教育がもつとどうかしなけりやうそなのではないか。もつと生命がなければならぬのじやなからうか。毎日毎日やつて居る事が形式は綺麗だ、整つて居る。しかし何か人間の生命の血が通つて居ない事じやなからうか。作り事だ、皆うそ事だ、眞似事だ芝居だ、活きた人間の社會とは違つた遊び事だ。雛壇の人形が姿勢よく並んで居るのを見る様なものだ。血が通はない。生命が動かない、空事だ、寒風の吹きつける十字路の巷に今日明日の生命をみつめてあへぐ労働者を見よ。そして其の眼から教室の中の室咲きの花の様な教育の姿を見た時、生命の躍動をおき忘れたのじやないかと思ふ。一体教師がなつちよらんのじやなからうか。もつと空想から醒めて現實の人生に足を入れて而して教壇に道を説かねばならぬのではないか。修身を説きつゝいつも自分のあさましき假の姿、偽善の姿に失望し、少からぬ不安と焦燥とを感じる。

言ひ足らない。言ふ言葉を知らない。あらわすべを知らない。しかし私はいつも感ずる。

そしてこれではならぬと思ふ。宗教などについても言ひたい。宗教なしの教育は魂がない様に思ふ。しかしこの事はもつと考へを練らねばならぬ。唯今これ等が私を強く刺戟するまでだ私の思ふ事は當つて居るのか當つて居ないのか。一人者のたわ事かも知れない。

◆ 西村 澄子

彼女は明るい朗かな性質と、優れた明智とそして純眞な感情との持主であつた。在學中バスケットの選手としてよく學校を代表して働いたものだ。しかし彼女の體質は運動選手として見るには少し華奢に出來すぎて居た。自分はよく「運動は健康のためだ、健康が運動の犠牲になつてはならぬ」と注意して居た。

縣の体育大會に優勝して歸る汽車に同車した。

「勝ちて歸る選手の心うつろ、優勝旗もつ顔に疲勞見ゆなり」
などとざれ歌を書いてやつた事もあつた。

卒業して厚狭郡厚南小學校へ奉職した。其の秋頃から健康を害した。赤十字病院へ入院した

り、厚南の某病院へ入院したりして静養した。

父もなく母もなく兄弟一人もなく、本當の一人ボツチの彼れ（姉一人あれど大阪にあり）は如何にも淋しさうであつた。病床に見舞つた筆者に「私の一生を見透して考へて下さるのは先生一人だ」といつてはホロ／＼と泣いてゐた。昨年十月から大阪の帝大病院へ入院した。

突然この四月三日附の黒枠付ハガキにて大阪の姉さんより四月二日午後一時歸幽致し候と通知して來た。そして別に手紙で妹の手帳の中に「澄子が死ぬ際は第一に守田先生に會はして呉れと書いてありまして、しばし涙にくれました云々」と書いてよこされた。

教育するものと教育されるものとは深い因縁事だ。それは時間の長短を超越した人間交渉なのだ。彼れ西村澄子は私の組で十週間教育實習しただけだ。しかし私との師弟の交渉はもう未來永劫つゞいて居ると思ふ。

謹しみて彼女の冥福を祈る。



◆ 火星 來る

八月の末地球は遠來の客火星を迎へた。何處の夕涼臺も談はこの星でもちきりである。今宵も東の天に火の様な色で輝く。火は強烈な情熱のシムボルである。冷い理智の人生は淋しい。強い火の燃える様な人生が欲しい。來る日も來る日も平坦な野道をたどる様な平凡な生存にはもう飽いた。少しは山もあり谷もあり峠もある變つた道が欲しい。悪い事も思ひきつてする強い魂でないと大きな善もなし得ないのだと思ふ。悪事をしやうとも思はないが、時折は腹のすく様な出來事にはぶつゝかりたいものだ。不徹底な生ぬるい日を送る事ももう飽きあきした。火星は赤い。赤は若い血潮の高鳴る青春のシムボルである。若い乙女は赤い帯を結ぶ。赤い腰

巻をする、赤いリボンをかける、若い嫁は赤いカノコをつける。赤は實に夢の様な理想にあこがれて花の御堂で踊る若き人の心である。かうした日に思ひ出多き生が送りたい。人の世はやがて縁となり青となり黒となる。そうした日ふりかへつて何の過去もない人生では如何に淋しい事であらう。再び來ないこの日この時力の限り勉強もしたい努力もしたい。火星が益々赤くまたたく。

◆ 運命の絆

難波大助死刑判決のあつた日、新聞記者が其の郷里の家を訪ひ妹あき子に弔辭をのべた。其の時あき子さんの語つた言葉は誠に傷ましい。

唯お察し下さいまし、悲しいか？ などと仰言つしやるのは無理でございます。私の今後の生活？ そんな事を考へた事も御座いません。あゝ何といふ——ほんとうに自分は生きて居るのだらうかと思ふ日がどれだけありますことか。かうなるも何かのめぐり合せの報いでも御座いませう。私はならう事なら神のみ前にこの身を生贄にして、この罪の萬分の一でも

許されたいと思ひます。

涙もろい自分はこゝを讀んでは泣き讀んでは泣き幾度讀みかへしたか知れない。未婚の十九の乙女が悲しい呪はれた運命のきづなに搏られて血の出る様もだへの言葉をきれぬに語つた心の中に立入つて考へる時涙なしに聞く事が出來ようか。短い言葉の中に千萬無量の感慨がある。大助惡むべきも人間としての妹あき子に何の罪があらう。何の咎があらう。唯運命の絆の嚴肅さにふるへるばかりである。

◆ 無縁の縁

赤切符を買つて汽車へ乗る。まるで知らない同志が一つの腰掛へ並んで坐る。からだだからだと軽くふれる。煙草の火を借る事もある。世間話の一つもする。次の驛へつくと先客はサツサと降りてゆく。もうこの人とは永遠に會ふ機會さへないのかも知れない。知らぬ人が並んで自動車へ乗る。からだのぬくもりが通ふ。別々の頭で別々の事を考へて黙想にふける。やがて停留所へつくと東と西へ別れる。そしてそれは永遠に會ふ事のない人と人かも知れない。ある

夜十一時半頃田舎の道を一里半程たどることがあつた。暗い上にシヨボ／＼と小雨が降つて居た。こわい淋しい恐ろしい。丁度自分から三十間程先を知らぬ男の人がゆく。全く知らない人だけでも、その人が居るためにどれだけ力強く思はれたか知れない。路の曲り角で心の中に感謝をのべて別れる。見も知りもせぬ世間の人々。何の關係もないと思ふ人と人々の間にも切つても切れぬ縁がつながつて居るのだ。これを無縁の縁とでも云はふか。

◆ 苦悶の象徴

厨川白村の遺著「苦悶の象徴」は一の文藝論で、文藝の人生に於ける價値を精神分析學にいふリビドー（抑壓された感情の力）の爆發に求めやうとする見方で必ずしも氏一流の見方といふ譯でもないが一讀の價値あるものだと思ふ。人間苦は情意の葛藤から起り、情意は世界を支配する力だ。理智は人生を教へるけれども人生を動かす力がない。個人の中に生じた情意の葛藤が抑壓された時恐ろしきリビドーとなる。避雷針から徐々に放電する事が落雷を防ぐ様に情意の葛藤は文藝となる事によつて人生の安全弁となるのだ。悲しい時には泣く事が必要であらねばならない。

だ。可笑しい時には笑ふ事が必要であるのだ。ハンカチーフを用意して芝居を泣きに行く人、嘘を知りつゝ小説で泣く心。何れも必要な心理なのだ。人間を教育する人は人間を正しく知らねばならない。

◆ 寫眞

寫眞の撮り方に二種ある。自分が見る爲めに撮ると、人に與へるために撮るとは自らうつり方を換へねばならぬ。人に與へる寫眞は必ずレンズを見て撮り、自分が見る寫眞は寧ろ横顔をうつすべきであると思ふ。

二三ヶ月前自分の前の教へ子から「私の近影であります」といつて洋装して寫眞を送つて來た。なつかしさのあまり幾度か名前を呼んで見たが、彼女は知らぬ顔して横を向いて居る。どうしても感情が移らない。人に贈るのにレンズを見て撮らなかつたこの子の心がうらめしくさへなつた。

自分で見る寫眞は横向きがよい。正面向きは毎朝鏡に向へば見られる事だし且正面向きを眺

めるのは何だか恥かしい心さへおこる。寧ろ横向きの顔を客観視するところに本當に自己のねうちを正しく判断することが出来るのだと思ふ。

◆ 永遠の誤解

「あなたは誤解されてゐらつしますよ」と親切に警告して呉れる人がある。誤解を誤解と知りながら宣傳して本當の誤解たらしむる人もある。世の中には南極の氷の様に永遠にわたつて解けない誤解もあるものだ。

男が川の上流であやまつて水に溺れて死んだ。二三日してこの川の中流で一少女が橋から落ちて死んだ。二人の死屍は流れ漂ふて下流の某の淵に浮んだ。村の人はこの二人の屍をあげ合葬して饅頭塚を作り夫婦塚と命名して永遠の愛を祈つてやつた。今この夫婦塚は男女の愛を祈るところとなつて居る。死人物言はず、二人は地下で永遠の誤解に泣いて居るだらうか。はた人間共のする阿呆を笑つてゐるだらうか。

◆ 幸 福

生温い風を縫ふて煙の様な梅雨が降る。机に頬杖ついて日曜の半日を送る。尋ねて来る筈の友も何か用事が出来たのか来ない。色々の事を想ふ、下では子供等が相撲を初めたらしく騒ぐ。

一体幸福などいふものが有るのだらうか。若しありとすれば其の所有者は誰だらう。大阪の貧民窟を見た人の談に四疊半の間へ三家族八人位寝るのもあるさうな。暑いだらう苦しいだらう。しかし広い庭園を持ち伽藍の様な邸宅へ三人か五人かの家族が住んで居る富者が、やれ盗人が入りはすまいか、火災が起りはすまいか、銀行が倒れはすまいか、寄附だ、税金だ、財産だ、相續だと心痛に目を送るのと較べて何れが幸福なのか知らん。上海に暴動があると云へば財界の恐慌に頭をはしらす資本主と、雨が降れば食はずに居るまでだ何れ日和の日もあらうとシャツ一枚着て煎餅蒲團にもぐりこんで寝て暮す労働者と果して何れが幸福なのだらう。賢者と愚人と何れが幸福なのか知らん。生半途の智慧があればこそ、自然の法則にも何とか理屈をつけたりして苦しむ。地震と云へば原因は何、いつ頃何地方へ起るだらうなど考へたりする。

何あれは餘が寢返りするのだと考へて居る方がどれだけ幸福なのかも知れない。先日福岡で百餘名の狂人の居る病室を見せて貰ふた。氣の毒な人だと思ふのは我々の世界から見た時のことで、狂人の世界から見たら、生とか名譽とか金とか地位とかに醜態する人間共の方が憐れむべきものか知れない。

昔ある國に王と乞食とが居た。王は寢ると起きるまで乞食になる夢を見た。乞食は寢ると起きるまで王となる夢を見た。然らばこの二人は何れが本當の幸福なのだらうか。美人と醜人とはどちらが幸福なのだらうか、杉田博士婦人畫報に青春の危機と題して

華やかな青春男女の楽しい生活の幕の蔭から毒を含んだ蛇のやうに隙を見て其の牙を彼等の上に加へやうとして覗いて居る魔が四つ居る。世の時めく者には必ず其の榮華を呪ひ嫉む敵人がつき纏ふ様にその青春の生活が華やかなればそれだけこの呪ひの蛇は一層執念く彼等の夢見るやうな浮心の上に苦しい痛い惱ましい迫害を加へやうとして其の一舉一動をも細心に窺つて居る。四つの魔とは戀の災。成功への憧憬。犯罪の淵。神性の病魔である。

美人なるが故に苦しみ己れの美を呪ふて死んだ人が昔から幾人あつたか知れない。とりとめ

もない事を考へてゆくと遂に幸福の持主は誰なのかわからなくなつた。しかしペンと筆を讀みながら涎を流して机にふせてうたたねして居る讀者はたしかに幸福の持主の一人にちがひない幸にして金もなく智慧もなく美人でもないのだから。

◆ 久野久子女史

納也の客舎で階上から落ちて自殺した天才ピアニスト久野久子女史のはなしを最近吉田高師校長、勝部同校教授、本間俊平先生の三方から別々の講演で聞かされた。一生をベートヴェン研究に捧げた久野女史が一度ピアノの前に坐ると、實に渾身の全生命をぶちこんでキーを叩いたものさうな。奏で終ると疲れて暫くは言葉も出ない程だつたといふ。時に手指の先から鮮血が流れ、それをハンカチで巻きつゝ挨拶されたりしたものさうな。もうかゝる一向專念藝術か生命か、生命か藝術かといふ域に入つた人は指先や手先で鍵盤を叩くのではない。血を持つて涙を以て否全精神全生命をなげこんで叩かれるのである。そうなつて初めて大藝術が生命を持つのである。われ／＼は女史の大藝術に對し敬意を拂ふと同時に、そのこゝに到られた永年

のかくれた努力に對し滿腔の敬意を捧げねばならぬ。而して吾々の何事に對しても全力の籠らぬ生活に反省と羞恥とを感じねばならぬ。女史の死因に就ては色々揣摩憶測が行はれた。中には失戀自殺だといつたりした。しかし實は指先を傷ひ全癒の見込が立たないのに絶望されたのだらうといふのが真相らしい。ピヤニストが指を失つたら生命を失つたも同様である。そうなる矢張り失戀自殺だつた。相手はピヤノ、指先が戀の邪魔したので失望した事になる。これは冗談。はるかに偉大な藝術家の靈に敬意を拂つて筆を擱く。

◆ 『私の生活記録』を読む

「歸る日」といふ戀愛小説を大阪朝日へ連載して問題となつた奈良女高師の訓導池田小菊さんが「私の生活記録」といふ隨筆様の本を書かれた。「歸る日」に對する世間の批難めいた聲の反駁の意味の出版の様にも考へられる。女性として佳也大膽な書き振りだと思ふ。序文の一節にこんな事が書いてあつた。

「力がほしい、力がほしい、始終不安に脅え続けねばならぬ様なこんなすがたにもうこそ愛想

をつかした。下つ肚に力のはいつたどつしりと大地をふみつけて立つ事の出来る眞人間、そんなすがたを限りなく私は戀しく思ひます」

又中程に女の無自覺を呪つたところであらう。こんな事も書いてある。

「學校を卒業して、お化粧をし習つて、愛想笑が上手になつて、結婚して、子供を生んで、そして臺所の隅で煤けて死んで終ふ様なそんな人生の安定路を迷ふて果てたくないと思ひます」

昨年十一月末自分は奈良に學事視察にゆき特別學級を世話して居られる池田さんの質素なすがたを一寸見た、こんな本は若い人にすゝめてよいか悪いか迷ふ。

◆ 頭をあげよ

三上於菟吉氏作小説日輪を読む。城木といふ青年が居る。あまりに智的であり、神經過敏であり、用心深いために、まつしぐらに走せる女性の戀から捨てられ、おまけに主家から放逐され、人生に失意して、雪の宵あるカフェーによるめき込みウキスキーをあふつて一切から遁れ

ようとして苦しむ。そこで虚無的な老人戸田といふ人にめぐり合ひ、其の宿へ連れて歸られて又酒をすゝめられつゝ、人生についてポツ／＼と説ききかされる。戸田は城木に職を興へやうとして大阪のある豪商の主人を紹介してやる。東京驛で汽車へ乗せる時

「青年よ、もつと頭を上げて、そしてまつすぐに歩け」と再三いふところがある。自分はこのを読んで本當に考へさせられた。青年よもつと頭を上げてまつすぐに歩け。理想が低い、あの明星を望め。そしてまつすぐに歩め。美しい花を眺めてさまよふたり、涼しい森蔭に長い休憩をとつたりすると道半ばにして日が暮れる。確實な足どりでトボ／＼とまつすぐに歩めよ。

◆ 屋 守

疲れた夏の日の午後、安樂椅子に横わり、見るともなく天井を見上ぐると一匹の屋守君が居る。蠅を追ひまわして徐歩したり、駈足したり、まるで運動場を走り廻る様に見える。重力の法則を無視した態度がひどく氣に入る。屋守は妙に夫婦仲がいゝやつだといふ譚を學生の頃漢文の本か何かで讀んだ事など思ひ出したりした。其のうちに僕の頭がポーツとなつたと思ふと、自

分が天井に上つてそこから見下して居て屋守が地上を徘徊して居る様に思へて仕方がない。自分が重力の法則から超越して天上界の人間になつた様な得意な心持になる。暫しかうした夢心地がつゞく。例の屋守君今一匹の蠅を追ふて居る。今度はうまく捕ればいゝがと一生懸命見つめる。丁度自分の真通りだ。蠅に飛びつかんとした其の刹那どうしたはづみか足を踏み外したあわやと思ふ間もあらばこそ。パチャと僕の右頬の上に落ちた。驚くまい事か、僕はキャツと叫んで飛び上つた。我にかへると僕は依然として青い顔して椅子の横に立つて居た。省みれば矢張りそこは地上であつた。驚いた拍手に天地が轉倒したのであらう。しかしこれはこの休暇中の僕の最大喜劇の一である。幸傍に見た人がなかつたので噂の種子にはならなかつた。

◆ 人間なるが故に

沖野岩三郎氏に「人間なるが故に」といふ小さい創作がある。神に非ず、禽獸にも非ず、人間なるが故に人間としての悩みを悩むことをよく教へてゐる。

青年士官Nは村の美しい處女Iと理想的の結婚をした。Nの家庭には今年四十五になる母が

一人あるばかり。母一人子一人の美しい人の羨むやうなうちであつた。或日Nは町からの歸りに新妻の爲めに一本のバラソルを買つて來た「今時代の若い女は幸福なものだ」とつぶやいた母は突然家出をした。隣りの町に住ふ一人者の休職將校の許に走り同棲する。村の人の噂はIが入嫁して母を追ふたのだと云ふらしい。Iは居たまらなくなつて離縁をせまる。母に逃げられた上に妻に歸へられてはNは全く困る。Nは其の日妻をピストルで威しつけて夫婦生活をつゞける。ふと母が戻つて來る。Nは其日妻をピストルで射殺して自分も自殺する。はなしはこれだけである。

兩性の心理上の特性や戀愛と結婚とに對する人間性を極赤裸々に露骨に批判してゐるあたり實に近頃いゝ小説として讀んだ。見るに相當高い識見を必要とするけれども味ふべき本だと思ふ。序文の一節に。

人間は如何に努力しても直ちに全智全能の神となる事は出來ない。さりとてどんなに願つても最早禽獸にまで復歸する事も出來ない。かうして獸性と神性との中間に立つ人性の一部分を書いて見たのが此の本である。つまり神にまで到達し得ない人間のもつ獸性との鬭争史で

ある。と。

◆ K の手紙

「恩給がついた。この十二月に止めようかと思ふ。しかし止めたら恩給だけで女房と三人の子供と母とを養はねばならぬ。粥をすゝつても生きられそうにない。でも教育がこの頃わからなくなつてこのまゝ續けるのは更に苦しい。實業界へども行けといふかも知れぬが、御承知の通り鈍物では一寸考へる。それにこの不景氣。四十にして不惑といつたが何の事かいな。おれは四十にして始めて惑ひ初めた。」

「一度來て呉れ給へ。おれの手料理で御馳走する。手料理で思ひ出すが此の頃食はねばならぬ事を不思議に思ふ。時々飯をたいて故意に忘れて見るけれどどうも忘れられない。夏の頃は半日位食ふのを忘れて見たが其の次には絶対に駄目。おれは氣が狂ふて居るのではないかと思つたりする。この次會つたら一つテストをかけて見て呉れ給へ。」

「おれは校長になつたのが間違の基だつたのだ。矢張人様の下についてあゝせよ、ハイ、こう

せよ、ハイ、と矛盾であらうが不合理であらうが只ハイハイで暮すはずだつた。君がいつか平
訓導の光榮とか云つたがいゝ言葉だとこの頃切に思ふ」

「六年生になつて片假名が書けないのやら、九々を知らないのやら澤山居る。もうどうにも手
がつけられぬ。そんな子供が大根を持つて來たり、鯛を持つて來たりする。「校長先生これを
上げませう」感慨無量で貰ふ。教生指導のときこんなはなしを参考にしてやり給へ。こんな子
供も地方には居るのだよ」

◆ 慈 悲

人生は結局一人ゆく旅だ。ある見方に於て誠にさうだ。然しそう考へる事は堪へられない淋
しさであり悩みである。神の様なあの幼児が母のかいなに抱かれてすや〜と眠る美しい平和
な顔を見よ。われ〜は大きな傘をもあつてゐる人と人だ。西條八十さんの唄に。

○

雨の降る夜に 母さんと

ひとつの傘をさしてゆく
路の明るさにぎやかさ

○

いつも淋しい踏切も

老犬の居る横町も

今夜がなんて恐からう。

○

雨よざん／＼音たてよ。

ひとつの傘を母さんと

いつも仲よくさしてゆく

夜のうれしさこのもしさ

◆ 剃 刀

月に一度か二度か、理髪屋に行き散髪をし顔を剃らせることは自分にとつては生活上最も大厄介な行事となつてゐる。先づ大抵の場合二十分か十分か先客を待たなければならぬ。有りあわせの新聞か講談俱樂部かとして見て居れど、實につまらない時間である。さて愈自分の番が来る、散髪だけはそれ程厄介とも思はぬけれども、顔剃りときたら全くたまらない。およそ世界で私の顔——この大切な——に自由自在に手をあてゝさすりまわした上、きたない石鹼をぬりつけて其上危険極まるあの鋭利な剃刀を當てる横着者は理髪屋ばかりである。自分の顔に最も多く手を當てた者は母であると思ふが、其の母でさへ、刃物を顔に當てる程危険なことはしなかつた筈である。中村吉藏の作であつたと思ふが「剃刀」といふ一幕物の脚本がある、一人の理髪屋が居る。自分より小學校時代成績の悪かつた一人の友達が高等官何等になつて散髪に来る。顔を剃りながら學校時代の追懐談をする。理髪師の頭が亂れ出す。學校時代の成績、今の地位、名譽、生活、それ等が對比される。理髪師がグラ／＼とする。鋭利な剃刀がグラサリと高等官の動脈にさしこまれる。幕。といふ筋のものである。自分は顔を剃られる時いつもこ

の話が頭にうかぶ。そして理髪師の顔を細い目で見上げる。自分が高等官でないから安心はしてゐる。

◆ 臍

「卓夫ちゃん早く着物をきないとかみなりが臍をとるよ」

「臍はとつてもいゝ。臍はいらんから」

時は夏の一日、夕立の來さうな午後、遠雷ひゞく、卓夫は今年七歳、眞裸で座敷をとびまわつてゐる。

母は着物を持つて追ひまわして居る。おやぢ思ふ。昔の子供に臍は不用だからとつてもいゝなどといったことを聞かない。今の子供は理屈ぼくなつたのか、果プラグマチズムになつたのか、果宗教意識が薄らいだのか。

x

x

x

或人影を用なきものとして、賣りて黄金に換へぬ。黄金だにあらば影はなくとも何かあらん

と思ひたればなり。然るに天下のもの皆影あり、一木一草影なきはなきに、彼只一人影なければ、人怪しみ且恐れて彼と交らず、山成す黄金も用ふるに途なく、遂に山林に隠れて悶え苦しみきといふ。

◆ 社會鍋

年の瀬のおしせまつた十二月二十七日午後三時大阪市上本町六丁目の奈良行電車の始發驛にさる人と會ふ約束で約一時間待つ事がおこつた。

タクシーの警笛と市電のあのさわがしい雑音とが暮の冷い風に漂ふて、せわしい淋しい氣持をそゝる。救世軍の士官が一人、社會鍋——貧民に年末を越させようとの慈善鍋——の前に立ちメガホンを口に當て、道行く人の喜捨を求めて居る。歩を止めて聞かうとする人もない。

「みなさん、あの寒さと飢とに多人數の家族を擁してゐる多くの貧しき人々の上を想像して上げて下さい。皆さんのお小使の残りのワンセントが年の瀬を越すのし餅となつてこれ等の人々の宅にとゞけられる事を思つて下さい。……………」

僕は約四十分見守つた。而して其間に喜捨をした人を五人見た。ところが其五人が一人の例外もなく全部十三四歳から十七八歳までの少女であつた。慈善する人は凡て少女なのだらうか。奈良行生駒トンネルの中で僕の頭の中に一つの疑問が往來してゐた。慈善するのはすべて少女なのだらうか。この時代の乙女に同情心が特に強いのだらうか。教育の効果（學校外の日曜學校も含む）がかうした社會的慈善に目覺めさして居るのか。果一種の乙女特有の虚榮心か（但し喜捨の態度からして必ずしもそうは考へられず）或は生活苦を知らず、働いた事のない乙女として金錢に對する執着が薄いのか？？？

◆ 無憂華

先日物故された九條武子嬢の最後の著書無憂華を読む。去年七月に初版を出したのに今年五月初めには百五十版を出したといふから大變な勢で讀まれてゐることがわかる。大体は感想和歌等の集められたものであるが、天才的藝術家肌の方であつただけに其の一句一句が美しい詩である。

感想の中から一二句借りて御紹介しよう。

女の涙。——

女の涙はうつくしい。それは冷たい客観の世界から離れたきはみなき愛の泉からしたゝり
る純情の一しづくである。

しかし多くの女子はこれをみづから遊戯として弄ばうとする。そしていはゆる涙の征伏がつ
ひに涙の陥穽となることに心づかない。かくて不良の兒を救ひ上げた慈母の尊き涙よりも、
みづからを詐つた巧みな涙が多いのは、悲しいことである。女は涙そのものを卑しむべきも
のにしてはならない。むしろ涙によつて象徴されるつゝましき純情の男子よりも多分にめぐ
まれてゐることを讚美しよう。それはまた涙によつて生きることの辱しめを償ふ所以でもあ
ると思ふ。

荆棘の野。——(その一節)

地上の歡喜は畢竟落花の夢にひとしい束の間のことである。眩惑の衣を脱ぎ棄て、裸のまゝ
の人間に立ちかへつたときは、更に踏み出すべき道がはつきりとみつめられる。そこには荒

漠たる荆棘の野が邊際もなくひろがつてゐる。

など、など。

散る花瓣の一片にも、窓うつ時雨の一雫にも詩人の想は微妙な形に於て動く。凡々たる吾人
の世界とは全く其の次元が異なるのであらう。無憂華は如何にも武子姫そのまゝを表徴した様な
本である。少しセンチメンタルにすぎるが、考へさせられつゝ讀む本である。

◆ 籠の鳥

歌に

籠で生れて、籠で死ぬ

小鳥の心は 淋しがる

といふのがある。ふと思ふ人生も矢張り小鳥の生涯とかわりないのじやないか。道德だ宗教
だ法律だ慣習だ風俗だ禮儀だとやくざな(?)約束の支配の中で思ふ事も言ふ事も爲すことも大
きな制限うけてトボ／＼とゆく人生は矢張り籠の鳥と大してかわりないのじやなからうか。

ゾムバルト著「無産階級」といふ本の中に

「試みに描け、兩側峨々たる高壁の中に通ずる一條の隘路あり、此所に半白の老人腕に一人の孫兒を抱きてトボくんと歩を移す。春光幽に壁間よりもれて落花時に紛々たり。孫兒は頭を上げて且つ怪しみ且悲しみつゝ聞いて曰く阿爺よ如何程ゆかば花園に出づべきかと老爺黙然として眼に涙あり。長大息しつゝトボくんと行く」

共産主義だ、無政府黨だなど云ふのは一寸籠から首を出して見た者であらう。……だがこんな事を考へつゝペンの雫を書いて居るのが既に籠から半分首を出して居る所業かも知れない。

◆ 歌 句

○ 薄明小椽に海みつむればほのかに青きかなしみのわく

○ 赤い花さく菟竹桃に今日も眞夏の陽が光る

○ 天は烈日地は深縁、海はこんべき蟬時雨しげん

○ 講義すまして一風呂あびて椅子に凭れて蟬をさく

○ 清い歡待心にひめて今ぞ去りゆくナポリ灣

○ 汽車で歸るか汽船にしようかこゝが思案の日出の宿

○ 歸る時刻が段々せまる別れともない雨の午後

◆ 春 待 つ 心

御手洗の浪のときめきに春のすがたがほのかにうかべども

橙の葉にふく荒い風に冬の音が去らない。
屋根の上に胸毛光らせてチ、となく小雀春を待つらん。
猫柳の芽がふくらんで小川に目高の集ふ日
遠山が黄を加へ土手につくしが頭をもたげる日
火鉢片手に原稿用紙に向へば春待つ心頻なり。

◆ 燈火可親

日脚短い秋の日が山の端に落ちると急に森の彼方から夕の扉がしめられる。垣根の虫の唧つ音もいとあわれに秋は静かに更けてゆく。
一人燈火のもとに書を繙く、人生これを越した至樂はない。讀書人にとりてまさしく秋はかき入れ時である。暑からず、寒からず秋宵の一刻も亦値五百金は下らじ。あれも讀みたし、これも讀みたしと日常思ひしも、つい多忙と疲勞のため果さなかつたそれ等の書をむさぼり讀むのはまさしくこの時である。

夜は更くる。電燈が時折風にゆれる様に動く。どこかで犬の遠吠がする。眼は愈さえる。心は愈澄む。一頁又一頁。一頁又一頁。

或は平常書き度しと思ひし研究物などの原稿を纏めるのも亦この時である。ペン持ちて原稿紙に向へば想は潑瀾と流れてたちどころに三枚五枚と書ける。懐中時計のセカンドを刻む音の間にペンの走る音が爰々と響く。夜は更くる、興は益々乗る。想はをだまきの糸の如くとぎれなしにつゞく。

夜は更くる。椽の下の虫も疲れたか鳴く音も弱くなる。眼は愈さえる。想は愈澄む。一枚又一枚。一枚又一枚。

秋はうれし、若き人よ、怠る勿れ、燈火親しむべし。

◆ 希望

人間は「明日は明日は」とのあてにもならぬ希望に今日の現實悲哀を忘れやうとする。生は苦と見る佛教の思想の中にも涅槃の光明に希望の糸が繋がれてゐる。希望がつかたら總べて

は暗黒である。苦しい日には、淋しい日には、惱ましい日には、たとへそれが幻影でもよい求めて希望を描け。山頂の御來光を禮拜せんとする行者には登る苦しみは感謝である。Kさんの手紙に。

「かうして人間はいつも何かを待つて居ます。他の方はどうか知りませんが少くも私にはこれ程がうなづけます。その待つものもたゞ一つでなく種類も多く、大きいもの、中くらいの、小さいのといくつもあります。恰も悦びが常に次々とおきて來ると同様に。

かつきりしたあてもないのに今日は誰からか手紙でも來るかも知れないといふ小さい希望を持つて朝學校へ行きます。手紙が來た時つり合ひのいゝために机の上をきれいにし、テーブル掛の皺をのして、コップにコスモスの花をいけてきちんとしておきます。今日は手紙も來まいと思ふ日には机の眞中に令女界の美しいのを一冊置いときます。歸つて見て手紙でも來ないと思ふと淡い悲しみを感ずります。

かくして人間は希望の十字架を荷ふてゲツセマネの旅をするものなのだ。

◆ 源平争亂

豫定の如く衆議院は解散せられた。そして直ちに先月の二十日には總選挙が行はれた。小黨や中立はあるが、大体に於て民政黨、政友會の二大政黨の争ひであつた。解散から選挙への僅々一ヶ月は全く國を擧げてこの争亂の裡に明けて暮れた。而してこの二政黨の勢力がほゞ伯仲の間にある事がこの争闘を一層ひき立たしめた。議會の第一黨とならなければ到底政府に立つて國政を執る事は出來ぬ。民政黨として見れば敗るれば内閣互解總辭職だ、如何にしても勝たねばならぬ。土下坐して一票一票に泣きついても絶對多數まで進まねばならぬ。政友會もこれまで絶對多數を占めて居たものを敵に位置を奪はれては當分立つ瀬がない。少々無理をしても惨めな負け軍になつてはならぬと。文字通り不眠不休血のにじむ様な大活劇を演じたものだ。つくづく思ふ。かゝる争亂は七百年の昔白旗赤旗入り亂して争つた源氏平氏の戦争と同じものだ。おれが天下の政權を握るのだと立ち上り、國を二つにして争つたそれとかはりはない。唯時代が違ふだけの事だ。血醒き白刃さげて命のとりあひをして相争つたのが舌と筆との力で

一票一票を取り合つて相争ふ様に變つたまでだ。緋威の鎧に身をかため、黄金造りの大刀をはき白馬銀鞍にうちまたがり意氣揚々と「我れこそは武藏の住人何某の何男何々冠者三太郎某々なるぞ相手として不足はあるまじ、よき敵なり御参なれ云々」と名乗つたものが、今は壇上からモーニング姿で「私が何々黨公認候補何某であります。皆様の御同情の清き一票によつて云々」とメソ／＼泣きつく様になつただけかわつたまでの事である。

争は面白い。碁でも将碁でも花でもカルタでもランプでも、まして野球やゴルフや蹴球や相撲やの様に強いものは更に面白い。政黨の争亂が面白いはずだ。一種の団体競争の遊戯だもの。

◆ 夕の鐘

一葉の詩にも歌にも、一幅の繪畫にも、或は又一片の音樂にも、それが名高いものであればあるだけ何物か人を魅惑し去るの力が籠つて居る。其の力が無いとすれば遂に永遠の生命を保持し得るものではない。而して其の人を魅する力、それは詩や歌や繪畫の全面に漲る力でどこ

がとつきとめて探り出す事は出来ない。ミレーの名畫晚鐘を見よ。

夕日の名残りの夕照も漸く消えて夕の帷が遠い森の彼方からひた走りに寄つて來る頃。

聖なる一日の野の働きを愉悅の裡に疲れた二人の夫妻、朝早くから働き透した土まみれのシヤベルやホー、手押車に乗せられた今日の收穫馬鈴薯の若干。

遠くから闇をふるわして寺の鐘が祈りを報ずる。

「天地創造の主、聖なる私共の神様！ 私共は私共の務め神聖なる今日の労働を唯今終りまして、夕の祈りを捧げるの幸福を持つ者であります。朗かな陽の光の中に何の不平も何の不満もなく一日中汗して働きました。得ました收穫は如何に僅かでありましても、愉悅の中に働き通したこの労働こそ何物にとまさる感謝で御座います。神様お休み下さいませ。

私共はこれから夜の憩いとに入ります。又明日も清い日が恵まれる事で御座いませう」

妻の口すさむ讚美の歌に夕闇いよ／＼せまる。

中村博士の作「夕の鐘」を読む。

○

ひとりの妹をかえしやりて
夕暮しづかに窓によれば、
廣野は煙りて月も出でぬ。
夢かと聞ゆる鐘のひびき。

○

^{せうから}同胞かたみに學びの庭
故郷を離れてはやいく春
父母こひしく語りあいて
今宵も別ちぬ涙の袖。

○

別れし妹を思いやりて
夕暮しづかに窓によれば
哀れをさそいて空のあなた

夢かと消えゆく鐘のひびき

題は夕の鐘であり、内容は遊學せる姉妹の懐郷の感觸の淋しさであり、言葉はすべて魅力ある感情である。

先日も下關辨天座に關屋敏子を聞く。輝く様なステージ、燃ゆる様な洋装、溢るゝばかりの愛嬌、それ等に調和した歌ひ方歌ひ聲。

あはれ床しき歌の調べ、夕べはるかに胸に聽けば、
心は歸る樂し昔。あゝ……………
あした彩なす雲の如く、君が笑ひの浮ぶ見れば、
いつか憂愁の影ぞ消ゆる。……………

嘗て聞いた三浦環・巽清次郎・立松房子等に較べて著しく民謡調を帯びたものが多くぐんぐんと私共の心の奥底に觸れる様に感じた。
美は魅力であり、魅惑である。

◆ 感 激

第九回極東選手権競技大會は去る五月の末明治神宮外苑競技場に於て行はれ、光榮ある好成績を我が國のものとして無事終了し、月の三十一日總裁秩父宮殿下の臺臨を仰いで日本青年會館大ホールで閉會式が行はれた。

選手役員來賓二千餘の諸員着席して時の至るを待つ。七時過我が秩父宮には燕尾服に大勳位を佩びさせられ岸會長の御先導にて御入場遊ばす。やがて式は型の如く初まり型の如く進む。暫くして君が代のメロデー突如として場内に響き渡れば愈天皇賜杯の授與式とはなつた。満場起立の中を我が織田選手が庭球の佐藤選手と共に恭しく壇上に進み、秩父宮殿下の御手から親しく榮ある賜杯を授けられる。この瞬間場内はシーンとして水をうつた如く莊嚴そのものである。たゞ寫真班の焚くマグネシウムの爆音だけが四邊の靜寂を破る。我が選手は何れももうなだれて感激の涙にむせぶ。中にはひそやかにすゝり泣く聲も聞える。

陸上競技に於てこそ稍自信はあつたけれども球技に於て、水泳に於て、野球に於て必ずしも

樂觀を許さぬものがあり、強敵比島、強敵中華の猛練習を風の便りに聞いては矢も盾もたまらず。雨の日も風の日も不眠不休の血のじむ様な長い練習。日本の榮辱を双肩に負ひて場に立ちての緊張の幾日幾月。今までのあたり我が代表選手によつてうけられる燦たる天皇賜杯を見ては緊張がパツとあふれて感激の嗚咽となる誠に當然の事である。

感激！感激！！吾人の人生には時々かうした感激がある。緊張の爆發した様な感激がある。教育も感激でなければならぬ。宗教も感激でなければならぬ。藝術も感激でなければならぬ。師弟も感激、友愛も感激、愛も戀もすべては皆感激でなければならぬ。

◆ 集 立 ち

御手洗のなぎさの香りに春立ちぬ。

校庭の櫻の蕾もふくらみぬ。

チ、と鳴く小鳥の聲にも、

水に輪をかく鷗の姿にも、

ひねもすをのたり／＼と寄せてはかへす浪の響にも。
なごやかな春陽は立ちぬ

この日この時、

我が蛾媚の麓の學び舎には、

何事ぞ。よろこびの高らかな歌聲きこゆ。

百幾十の人々の巢立ちなる。

よろこびに満ちた歡聲のうたげか。

送る者送らるゝ者、

惜別にくゝる涙を笑顔にかくして、

別れのさかもり喜まさにたけなは。

あゝされど

巢立ちする者よ、

時は春！よろこびは今頂いたゞきにあらう

されど

西部戦線異常なしと誰かいふ、

見よ汝がゆく戦線の緊張と混乱と不安と、

ゆくては必ずしも春日の喜のみにも非じを、

社會の浪はつめたし、さびし、悲し、

か弱き翼に力一パイの自信をこめよ。

悲しきは自信なき囊擔へる旅人の姿なる。

はなむけせむ三つの言葉を、

至誠と努力と聰明と、

至誠の二字に盛られる汝が心臓ハート。

努力の二字が包む汝がかいな。

聰明の二字に輝く汝がひとみ。

これぞ神の與へ給ふま玉にも勝る寶なる。

ゆけ勇ましく、
時々突風に會ふであらう。
されど、

時々吹雪に方角を失はんとする事もあらう。
されど、

三つの寶の囊をさげ
勇ましく往け、

送る者は泪の祝杯手にして
高らかに叫ばむ。

西部戦線異常なし。と。

◆ 神の聲

飛行機の飛ぶ音がするそれは夜であつた。

桃江「飛行機ならお星様もとれるだらうね」
と眞面目の様な冗談の様な事を云ふ。

光子「お星様は雲へくっついて居るのだから採られやせん」と眞面目である。

桃江は八歳尋常二年生、光子は其の妹六つである。時折子供だけの世界をのぞき見するがよい。そこは吾等の想像もつかない別の世界である。三次元の世界は大人の世界で子供の世界は四次元五次元非ユークリッドの世界である。かゝる世界を名づけて神の國といふ。

◆ 百

百日紅さくらびさく春の暮

お宮の石だん百七つ

百箇日目のおさな兒の

百日咳せきの願かけて

百度参りや母の愛。

私

◆ ある年の日誌より

田舎の家にも朝日が輝いて大正×年の初春がめぐつて来た。とく起き出でて若水を湧み身を
淨めて天神地祇に此の年の幸を祈り一ヶ年の計を立てる。

「日本の小學校教師」これが自分の一生のモットーである。去る年も去る年もこれを理想と
しこれを標的として歩んで来た。たとへ實現する事は出来なくても一步又一步、これが自分の
一生のプロセスの總べてである。理想は遂に實現され得ないかも知れない。然し實現されない
からとて放つては遂に花の一枝だに折りとする事は出来ない。矢張り目標は遠くて大きいのが張
合があつて男らしい。

でもふりかへつて修養努力の足りない自己が恥かしい。三百六十五日唯一日だつて空しき日
を作らず、總べてを精進向上の過程としやう。未熟なもので教育者だなんてほんとに恥かしい

◆ 蝸牛のうごめき

冬休みの數日を豊浦郡の片田舎の宿屋の二階で暮した。夜は長し語るに友は無しつれくな
るまゝに色々と物思ふ。教員生活を初めてから十三年の回想が次から次へと廻轉した。そして
現在の自己を素裸にして放り出して冷靜に客觀的に正視した時一種言ひ様のない淋しい心にな
る事をどうする事も出来なかつた。自分は非常に狭い世界に生きてゐるのだ。囚へられた思想
囚へられた感情、囚へられた信念、自分の考へる事は實に狭く自分の言ふ事は實に淺薄だ。そ
して自分の行爲には何の力もない。そして手も足も出ない。思想のしがらみの中に蠢めて居
るのだ。本を多少讀んだ、研究とか修養とかむつかしい事を考へては多少あせつた。然しそれ
は結局何でもなかつた。讀めば讀む程あせればあせる程丁度蠶が糸を出せば出す程その繭は丈
夫に自分の身を包む様に囚はれて仕舞ふのだ。蝸牛が殻の中でうごめく姿が全く自分を表徴し
てゐるのだ。この年こそ大正十四年こそこの殻から抜け出して、たとへ歩みは遅々たるも一步
一步確實に今少し廣い世界、今少し自由な天地に生きてゆきたい。何物にも囚はれないで。

◆ 充たされざる悲哀

冷い風に柿の葉も大抵は散つて、紅く熟した實が二つ三つ梢に残つて居る。秋も段々更けて
ゆく。冥想にふける、何かしら充たされざる悲哀が心の底を流れる。心の底のその底の又其の
底のその底をと段々深く掘つてゆくと原因がありさうである。高き理想に懷れて現實の空に惱
むのであるらしい。十幾年本當に忙しき日を送つて來た。唯一瞬だつて無駄にしない様にと追
はれ／＼して過して來た。丁度森の彼方に明滅する燈火を尋ねてゆき暮れた野邊をとぼ／＼と
歩みゆく旅人の姿にも似て。しかし求め得たものは疲勞と飢餓と懊惱と失望とであつた。理想
はあくまで空であり、現實は永久悩みである。人生は理想を追ふて現實に悩む道程だと悟り得
るだけでも尊いがそれさへさとりきらぬあわれさ。理想を捨てるは勇らしくなく、現實をあき
らむるにはあまり執着が深い。充たされざる悲哀に秋はゆく。——某日の日記より——

◆ 月の感情

一月逝きて二月が來る。この月はすぐ立つ。無常の感のする月である。自分には月毎に特殊

な感情がある様に思はれる。そして月毎に之に配する花があり、之に配する色がある。試みに
書い見よう。

一月	希望の感	水仙	黄	新年
二月	無常の月	山茶花	白	光陰
三月	惜別の感	ねこやなぎ	緑	卒業
四月	平和の感	桃	淡紅 <small>さき</small>	入學
五月	熱情の感	ダリヤ	深紅	春陽

◆ 讀書千卷

十月初旬田中寛一博士著教育的測定學を讀み終つて、自分の讀書が丁度千卷に達した。千卷の書を読んだら多少物もわからう、識見も確りしよう、人前に出てもものが言へやうなど思つたが、とてもそんな事は思ひもよらぬ事だ。しかし自分の讀書目録を繰つて見るとかなり努力してゐる。口では一口に千卷といへど。千卷讀むは容易ではない。一年五十冊宛讀んだとして

二十年かゝる。而して一年五十冊讀むためには平均一日五十頁讀まねばならない。一日に百頁二百頁讀む日もあれど一頁も半頁も讀まぬ日もある。平均五十頁はそうやさしい方ではない。而して自分のこの讀書目録は明治四十二年自分がまだ師範の二年生であつた頃から記録し出したものである。其の頃星亨——僕は其の頃第一の偉人だと崇拜してゐた——が米國公使となつて行き門を閉ぢて讀書にふけり書棚の目星いもの一切に目を透してから門をあけたのだ、五十幾才で刺し殺されたのに一生に三萬の讀書をして居ただの聞かされて、いたく感動したものであつた。又恩師に讀書癖の人になれと勵まされたり、色々の刺戟で寸陰を惜しみ分陰を惜しみ本をあさり讀んだ。しかし今ふりかへつて見ると手當り次第讀んだ亂讀のきらひがある。常識的にはなつたけれども深みが足りなくなつた怨みを持つ。

今や天高く氣澄みて燈火親しむべき好季節である。身も心もひきしまるを覺える。若き日の思ひ出にうんと讀書致しませう。そうして若き方々に私の讀書記録の方法をおすゝめしたいものだ。

◆ 祈り

「神様。私は私のベストを盡しつゝあります。この上は一切をあなたにお任せ致します。私のなします事があなたの御心に叶はなかつたり、私のなしますことに力が足りなかつたりしましたら、それは私の元來の力の不足、熱の不足、修養の不足、努力の不足であります。この位の事しか出来ないやつだと御宥し下さつて更により強い力をお與へ下さいませ。すべてはあなたの御旨のまゝにおさばき下さいませ」

こんな祈り心に日々を楽しく働いた日もある。それは身にも心にも精氣満てる若き日の頃の事であつた。

「神様。私は私の心の醜さにほと／＼愛想づかしをしてしまひます。」

「神様。私はどうかすると自分を買被つて困ります。弱い力を持ちながら大きな強い力の持主でもあるかの様な妄念や夢想に追はれます。そうしては失望といふやつにせめられます」

「神様。私は不平を持つてはならぬといひいひ不平を持つ弱き者であります。この心のひがみ

をどうしませう。」

「神様。私は時に道徳を疑つたりする自己の弱さを恥かしく思ひます。本能や衝動のまゝに動く自己を肯定して、そこ等にある道徳観をいゝ加減に否定して行かうとしたりする自己を淋しく思ひます。」

「神様。私はどうしてこんなに功利的になつたのかを恐れます。もつと世の中を純に淡泊に見得た若き日もあつた筈にと思ひます」

「神様。愛さねばならぬ愛は弱くして、愛してならぬ愛は強い自己を見ます。求めなければならぬ愛を捨てゝ求めてならぬ愛をさがす醜さをどうする事も出来ません」

「神様。無明は悩みであると知りますが、偏見や妄念多き明は更に深い悩みではないでせうか。智慧淺き私はかゝる明よりも寧ろ無明を願ひます」

「神様。私の醜き一切をうちあけてあなたに總べてをお任せ申上ります。お宥し下さるか。お罰し下さるか。果お救ひ下さるか。すべてはあなたのみむねにあります」

今日も机の上に頬杖つきて自己を反省する。神のみ前になまける己れをさらけ出して怠れる

此の頃を悲しむ。

◆ 單 調

人生の無聊に倦む。

來る日も來る日も平々凡々な唯一條の野路をたどるにも似た單調の人生にも大抵厭いた。無限地獄の最大の悩みは石の地藏さんにされるのだといふ。變化なき生の悩みこそ最大の苦痛でなければならぬ。時々汽車だつて脱線したり、衝突したりする様に、飛行機だつて墜落する様に。道のない田畑の中を踏み歩いたり、野の小川へ流されたりして見たい様ないらだたしさを覚える。

今日机にもたれてふと人生の單調を呷つ。

さりながらそれは幸福な日の贅澤な願望であらう。有明海沿岸の大海嘯の慘狀を見たら矢張りゾツとする。平凡がいやといつてもあゝした悲惨を待つ心ではない。

◆ 春 !!

二階の窓を明け放す、机に凭れてポカンとして居ると窓の外から春の冷い風が流れ込む。

机の上の一輪挿には菜の花が弱々しさうに首をかしげて居る。僕には春は陽氣なうれしい季節ではなくかへつて淋しいものうい時である。草も木も野も山も海も丘もすべてに發芽のよるこびと伸びゆく希望とが満ちあふれても、其の中にひし／＼と流れる春愁の氣持を如何ともすることが出来ない。

毎年毎年かうした心緒に春を迎へる。はたして何を意味するか。卒業生を送り出した惜別の情の名残りか。將三月といふ學校の節季の多忙を送つたあとの物足りなさか。果新しき學年を迎へる前の或一種の緊張か、それは征途に上る勇士の心持にも似た。

しかしかうした寂しさの中にも一脈の希望が胸にひし／＼と逼るを感じる。頭を擧ぐればお大師様の森は霞にぼかさされ、左伊保木の山は夢の様に浮いて居る。春の浪にうつる日の光にも希望のときめきが見える。

◆ 病 氣

冬服であつたと思つたのに白い夏服を着て見舞に来て呉れる。冬から夏へかけて寝て居る様な氣がして床の中でイラ／＼する。

ジイツと天井板をみつめる。二つの節穴がある。その穴から子供の顔が出る。藤田、吉本、澤田、吉規、淺井、宮川、……やがて教生の顔が交互に出る。

一方の穴が太くなる。

ズーツと松並木の道路。夜だ。月の光が青く其の影を大地に横たへる。甲州街道らしい。

肩のあたりがスラリと瘦せた一人の武士が夢の様な足どりでヨロ／＼と来る。見れば右手には白刃をさげて居る。疲れきつた病み上りらしい。机龍之助だ。

ふと一方の穴を見る。古い陰鬱さうな洋館三階の家が立並んでゐる。角からみすばらしい服装をした大學生がよろめく様に出て来る。ラスコーリニコフだ。今下宿の老婆を一撃で殺して殆んど自意識を失つて居るところらしい。(罪と罰)

又角をまわるとさつきの白刃をさげた武士と出會ふ、オットあぶない。
武士は大學生の右肩から乳の下までざくりと一太刀あびせる。大學生はキヤツと叫んで倒れる。武士はまたよろ／＼と歩く。
竹笛の音がする。茂太郎がいつも吹く笛らしい。二匹の狼が来るおつとあぶないと思ふ途端余の右脚へかみつく。痛！右手で一匹の蚤を捕つて居る。夢を見るのだと意識しつゝ夢を追ふて居る。夢の中にうつゝあり、うつゝの中に夢あり。再び天井の穴を見る。又顔が見える。卒業生の方らしい。

◆ 入 院

自動車に乗つた。光ちやんの「サイナラ」といふ聲が妙にませて聞える。若し大きな手術—生死の運命を醫師の手に委す様な—であつたら、このサイナラがある深刻な聲となつて響くであらうが、高の知れた小さい疣一つとる位の小手術だと思つて平氣を装ふ。それでも心のどのどこかに一種の悲愁に似た心持が動く、物事は萬事考へ方だ。すべては運命だ唯一日の旅出

さへ生死を神にまかせる生き物人間ではないか。生別は即ち死別かも知れない。こんな不安が自動車に揺れる。

病室満員の理由によつて病院から一町程離れた百姓屋の部屋の表八畳を借ることになった。造作は悪いけれども兎も角新しい家で畳も古くない、極靜かな氣持のよい部屋であつた。右にも左にも雞舎がある。賑かではあるが少し臭い。しかし四畳半の續いた病室で隣同志氣兼し合ふのと較べると全くブルジョアである。病院生活は思索の時である。僕の人生觀が第四の更生をやる様な氣がする。

× × ×

一寸した手術でこんなのは軽い稀に見る軽いものだと宣告されて居るし、局所麻酔でやるから少しも痛くはないのだと再三聞かされて居るし、おれも男だ少し位痛くたつて我慢しなくては人目もあらうと反省し鞭撻してゐつゝも尙ある不安がひし／＼と逼る。痛くはないか。出血が多くはないか。きる。どんなに切るのか。光るメス。注射。心はこんなもので一パイになる

私の將來の計劃精神衛生學の組織についてしんみりと考へて見ようと思ふが、どうかすると中途から心の中一パイを恐怖に似た不安が占領する。

◆ 死に面して

年頭匆々から死に面してなど縁起でもないと思はれるかも知れないが、私の今の心の中は、「死に面して」で一パイなのです。一休も言つた。元旦は冥途の旅の一里塚だ目出度くもあり目出度くもないと。

二男卓夫は附屬小學の一年生でした。十一月二十三日遠足で千坊山までも元氣に登つたのでしたのに、翌廿四日から發熱急性肺炎に急性肋膜炎を併發し更に腹膜炎まで加はり、まだ何といつでも弱い身体なので、これ等の病氣には堪え得ませんでした。この地としては出来る限りの手當をしてやりましたが、遂に駄目になりました。兩親兄弟、二人の祖母、二人の叔母、受持の先生、看護婦等の手厚い愛の看護の下に十二月四日午前四時三十分遂に息をひきとりました。愛の純情のみ手に抱かれたまゝ一人で永遠に歸らぬ旅に出て行つたのです。

卓夫は大正十年十月六日の生れで七年余の短い一生でありました。残る親心から申しますれば、可愛想で可愛想でなりません。しかし總べては神のみ知り給ふ宿縁であり約束であつたのだとあきらめて居ります。近親の總べてに守られ出来る限りの看護の手の中にほんとうに静かに逝きましたのはせめてもの心やりであります。人間の一生は何年のものだと定まつて居るわけではありません。五十年も一生、七十年も一生、七年も亦一生でありませう。どうせ一度は遅かれ早かれゆくのでございます。人生の悩みを知らず逝つたのはかへつて幸福であつたかも知れませぬ。

死の臨終に直面して私は多くの事を教へられました。それは彼れが私に對しての置土産であつたのでせう。先づ私は人生の無常をまともに教へられました。次で人間の生命の力を教へられました。次に私共の信仰淺き事を教へられました。而して人間の愛の如何に強いものかも教へられました。死して彼れは幾つかの教訓をしたのでした。かうした彼れの大孝を合掌して感謝してうけ入れて居ります。これ等については亦語るときがありませう。

去年愛兒をなくせられた久保先生から「子供をなくすると親が身体を痛め勝ちだ。一層用心

しなければならぬ。親が身体を丈夫にし、長生をしてせめて子供の印象をいつまでも守つてゆかねばならぬ。子供の事は親より外にいつまでも心に持つて呉れる人はないから。かうする事がせめてもの冥福の祈りだ」と慰め勵まして下さいました。毎日毎日ま心のこもつた弔慰のお手紙をいただきました。一々佛前で読み上げました。そして人情の美しさをしみく味ひました。

夜更けて一人机によれば元氣な卓夫の姿がうかびます。色々と御同情を賜ふた多くの方々に紙上で感謝を捧げます。

◆ 縁

縁は妙なもの。

ふとした事情でつながる。

約束であつたのだらうけれども。

あとになつて考へると感慨深いものがある。

年の瀬に立つて

來し一ヶ年の縁を思ふ。

六月大分縣に講習に出掛けて九州と縁を結ぶ。

十二月小樽市から一教師が來て滞在二週間、個性調査精神検査の研究をしてゆく。北海道と縁を結ぶ。

十一月朝鮮の某校から來ないかとの交渉があつた。斷つたけど鮮地と縁を結ぶ。

八月小論文が米國の心理學雜誌へ翻譯されて登載せられた。米國と縁を結ぶ。

十一月地方賜饌にまねかれるの光榮に浴した。皇室と縁を結ぶ。

十二月卓夫長逝。十萬億士の淨土と縁を結ぶ。

すべては久遠の昔よりの、

約束だつたのだらうけど。

ふとした事情でつながる。

縁は妙なもの。

◆ 子 を 思 ふ

遂にゆく運命なりしかあゝあ子は父をのこしてなぜ一人ゆく

かたるにはあまりに哀しかたるにはあまりにさびし我子ゆける宵

よもすがらみ佛の前にかしづきぬありし日のこと思ひ出しつ

病間の日記をくりて今日も今日も机の前にほろ／＼と泣く

み佛の前に泣き伏す我が妻をなぐさめに來てまたわれもなく

◆ 本の評

下關梅光女學院のF院長は私の最も崇敬する方の一人であります。私のこの度の小著「女性教育家と修養」を一部お贈り致しましたら、丁寧なお禮狀がとどきました。それから三四日して又ハガキで左のおたよりを戴きました。

「車中貴著拜見。昨日今日にてやつと讀了しました。これ迄讀みました小著にてあんなに興味深く且教へらるゝ事の多大なりしものは見當りませんでした。有り難う存じました。學校の女教師にも回覧させたいと思ひます。數年間に於ける御進境、只々感謝の外ありません。殆んど總べてが異論なきもの、特に終りの二三章は職業柄共鳴深く覺へました。信仰の問題につきもつと承りたいと存じました。又私の考へも申したいと思ひました。右不取敢。長崎より島原に出で三角に渡り當地に來ました。

雨中阿蘇に向ふ。夕方四時半。熊本驛にて。

東京女子高等師範學校の下田次郎博士よりの來信には。

「前略——扱て昨日は高著女性教育家と修養御贈呈下され正に拜受深謝致します。斯種の著述は從來とともあるべきもので今後とも少し出て宜しいものと存じます。拙著が多少とも感銘を與へました事を本懐に存じます。云々」
少さい著述にも大きな響があるものだ。

◆ T

八月五日九州からの歸途下關に立ちより、Tのお位牌をおがまして貰ふ。蠟燭の火がゆらくとゆれて線香の煙が流れては消える。佛前に合掌すれば冥想は十幾年の昔に歸る。

Tは私が男兒を受持った最初の組の優等生であつた。四年五年六年と教へた。頗る優秀な頭腦と負ける事のきらひながんばりとを持ち身体も丈夫で申し分のない兒童であつた。尋常科卒業の時知事より表彰され、萩中卒業の時も亦知事より表彰された。松山高等學校から東京帝大の文科へ入學した。途中で病氣して一二年後れて昨年文科印哲科の二年生であつた。それがふとした事から病氣にかゝり、兩親や祖母の手厚い看護も其の効なく今年三月五日遂に歸らぬ旅

に往つて仕舞つたのであつた。學問のすきな彼れは學問をしながらこの人生を終つたのだから満足かも知れないが、とり残された親御の心になるとほんとに堪へられない事であらうと思はれる。しかもTは唯一人子なのである。「先生、勉強が障つたのなら、あれ程勉強させるのであればありませんでした」と泣きくづれるお祖母さんの愚痴に慰める言葉もなかつた。眼を擧げると、

篤行院英質良雄居士

とかゝれた新しいお位牌が涙をさそふ。(盆の日)

◆ 教へ子

「先生、暫くでございました。お變り御座いませんか、ツイ御無沙汰ばかり致しまして申譯も御座いません」

「おやHさんでしたね。大きくなつて全く見違へてた。お達者でしたか。これあなたの坊ちゃん?」

「はい、もうこんな大きなが居ります」

十年も昔尋常六年で教へた子供が立派な母様になつて慇懃に挨拶してゐる。學校時代成績が悪くて毎日々々残しては攻めたり、叱つたりした事を思出す。

「お世話になつて居ました頃は特別先生に御心配を掛けて居りましたが」

と述懐して、眼に白い玉が光る。どう挨拶していか困つてモジ／＼する先生。所は下關停車場のプラツトホーム。

「でもお蔭で主人が商會の方の信用がありまして、どうにか楽しく日をたてゝ居ります」

それから暫く同窓乙さん丙さん丁さんの動靜の噂をする。談の間々へ學校時代特別世話になつた禮を二回も三回も夾む。其の度に先生ヒヤリ／＼とする。

しかし昔教へた教へ子がなつかしげに挨拶して呉れると初めて先生をして居る甲斐がある様にさへ思ふ。人の子を損ふ事なしに正しく導き得たか、彼れは幸福であつたかと反省すると自信を以て「然り」と答へ得ない氣はするけれども。

x

x

x

先日下關で昔私の教へた子供達男女十余人集つて懐古の會を開いて呉れた。通知の方法が無く電話の口傳へが走つた位だから集りは小人数であつたが矢張りなつかしいものである。

立派な商人になつて居る者、事務員になつて居る者、専門學校の學生、女學校の先生、ピヤノの先生、お花の先生、立派な奥様等になつて居る者であつた。昔をしのぶ意味に於て昔の學校の昔のまゝの教室に集る。

「先生は年がよらんぞ」

「イヤ頭の先が少し光るじやないか」

「白髪は昔もあつたかいのう」

「ひどうに叱られた事がある——それ掃除をなまけて」

「先生Fのやつ中學二年で落第しましたで」

など／＼ノンセンスな雑談に午後の日が照らしつける。先生西瓜にぱくついてニヤリ／＼。せりふは五郎劇其のまゝの喜劇でも心中全く感激的一幕である。

◆ F より

「先生、四度目の新しい年を迎へて、平和な村に一步一步蝸牛の足跡を残して居ります。

先生の三月號教育にお書き下さいました「老打？若打？」にヒヤリと冷い小刀をさゝられた私で御座いました。そして、今年こそは！と波のゆり易いこの年をむだにすまいと踏み出した私で御座いました。先生の御言葉を思ふといつもキリストの「今日は今日にて足れり」と言はれたことを思ひ出します。私たちは毎日今日の苦しみを——持たねばなりません。今日の苦しみを嘗め得た人が今日生き得た人だと思ひながらも猶利那々々を無意義に過して居る私で御座います」

片田舎に居るFさんではあるが、強い生き方を生きて居る人である。いつもFさんの手紙には私を感奮せしむるものがある。Fさんには強い信仰があるのだ。神によりて生きる人には他の及ばない強さがある。今日の苦しみを嘗め得た人が今日を活きたといひ得るのだとの覺悟と決心と信仰とは尊いと思ふ、彼女の上に幸あれと祈りて。

◆ 著 述

私にとつては原稿を書く事は勉強でもあり、修養精進でもあり又趣味でもある。其の結果の著述としてこれまでに出版して世に出したものが二三ある。大正十二年の初め東京の明治圖書株式會社から出した「實驗精神検査法」(四六版二九〇頁價壹圓九拾錢)。は私の處女出版であつた。同年九月の大震災で紙型も在庫品も全部焼いたのを幸絶版とした。

次に昭和三年三月東洋圖書株式會社から出した「實際的個性調査法」(菊版三六〇頁價二圓八十錢)は私の最も力を入れたものでもあつたし時代の流れに出た爲めもあつてか二十版を出した程よく讀まれた。第三の著述は「女性教育家と修養」(四六版、二〇〇頁價六十錢)で女子教育家への贈り物として書いたものである。

第四の著述は昨年東洋圖書株式會社から出した「實際的職業指導法」(菊版三七〇頁價二圓八十錢)で前述個性調査の本の姉妹篇をなすもので装禎なども全く等しく仕上げた。矢張り時代のものである爲めか割合よく讀まれて居る。

本書ベンの年第一輯は私にとりて第五の著述をなすものでこれまでのものと少し風變りなものである。私には尙ほ其外に第六第七第八の著述の材料が集めてある。段々と發表してゆきたいと思つて居る。

昭和七年十月二十日印刷
昭和七年十一月五日發行

山口縣室積町一八六
著作兼 發行者 守田保

山口縣熊毛郡光井村一六九六
印刷者 林繁人

山口縣熊毛郡光井村一六九六
印刷所 渡邊印刷所

終

